站口
355
76

25. 8. 23

I 2928
0

355-76
32928

序

今から凡そ千二百三十年前、即ち、天武天皇の御宇に、神代より語り繼いで來た傳說を、稗田ノ阿禮と云ふ史人に暗記せしめてゐたのを、その後、二十年ばかり經つて、元明天皇の朝、その口述する所を、太ノ朝臣安萬侶の記錄したのが、我國最古の書、古事記これである。

我等が祖先の思想、行績は、實に此書に依りて、髣髴せらるし、又、大自然が、如何に强い印象を有する『生』であつたかを傳へて居る。故に、この國家的傳說が爾來我國、嚴正な大經典となつたのは疑ふの餘地が無い。

大正 30 6.
内交

斯くの如く、美しき國家的大傳說は、最も、必要ではあるが、事、餘りに離れて居るので、何うしても各地箇々の傳說に就て聞く方が、我等により以上の興味を感ぜしめる、そこで、各地に散在する傳說を蒐集して、記錄する事は、自然の欲求でもあり、また、當然のことである。

即ち、國民、箇々の祖先が傳へ來たつた事實を、種々なる形式を經て、今日に遺して居る事は、その地、その人々から一種云ひ知れぬ、情味を得るものである。それが、軈ては、人情を傳へ、風俗を想はして、後日國民性を示す樣になる事と思ふ。

で、學術的では無く、各地々々の大小區々の傳說を蒐集して、日本以外の各國諸傳說と比較したいと思つたので最初、我國に散在する幾百千の傳說を綴つて見た。無論古事記の如き、大記錄として、著したのでは無く、唯、我國各地の昔を偲び、共に俱に、その祖先の行績、思想等を聯想して、永く〳〵土地と親しみ、人物と温みして、この美しい國民性を知りたいと思つたからである。

それであるから、著者は、六ケ敷い意味で、傳說を研究爲ようと云ふのでは無く、唯、口碑そのまゝのものはそのまゝとして綴り、氣分化すべき必要のものは氣分化し、古書に依るべきものは古書に依り等して玆に公にしたのである。學術的に、傳說研究の必要があれば、これに依つて批評眼を光らせばよい分けである。それは、讀者その人々に任して置く。

此書は、我國傳說の、ほんのその一小部に過ぎないのは云ふを俟たないが、讀者の比較研究の便宜を思ひ、各國傳說を交互

に發行することにした。即ち、日本、東洋、西洋、海の四種に區分して置いた。その中、海の部とは、前三部を統一して、特に海に關する傳說を蒐めたものである事を斷つて置く。

そして、色々と、文体にも、苦辛したが、各傳說の性質により成るべく、それに匹敵した書き方で筆を持つ事にした。編中に、寫生的なもの、講談的なもの、神秘的なもの、骨稽的なもの、お伽的なものゝあるのは、皆右に因つて書いたのである。

また、此書を初め爾后の書中に蒐集した各種のものには、所謂傳說、神話、童話的等のものもあるが、何れも唯傳說として蒐めて置いた。無論、是等の境界を明にするに困難なものもあるので、以上を論ずる事は學術的研究の上、早晩著す事にする。

要するに、傳說の種類を便宜上、說明神話的、天然、緣起、城跡、妻爭、巨人等其他數百種の項目に分類して講究すれば色々と興味が生じて來る。一箇の傳說に二箇以上の性質を有するものもあり、二箇以上の傳說で一箇の特別なる形式を示して居るものもある。で、形式、內容は講究すればする程單純でない事が解る。假令一箇の傳說にもあれ、仔細に研究して行けば、その特色、成分、名稱、性質等が色々と分れて複雜な形を表するのであるから、その研究も容易では無からうと思ふ。

さて次に、書中の挿繪、內表紙は全部著者が、描いたものである。讀者に不快な念を與へるものもあらうが、何分畵筆に馴れない素人の著者が描いたのであるから諒せられたい。更め、玆に斷つて置く。

序

大正六年三月

早咲きの櫻綻ぶ夜明けがた

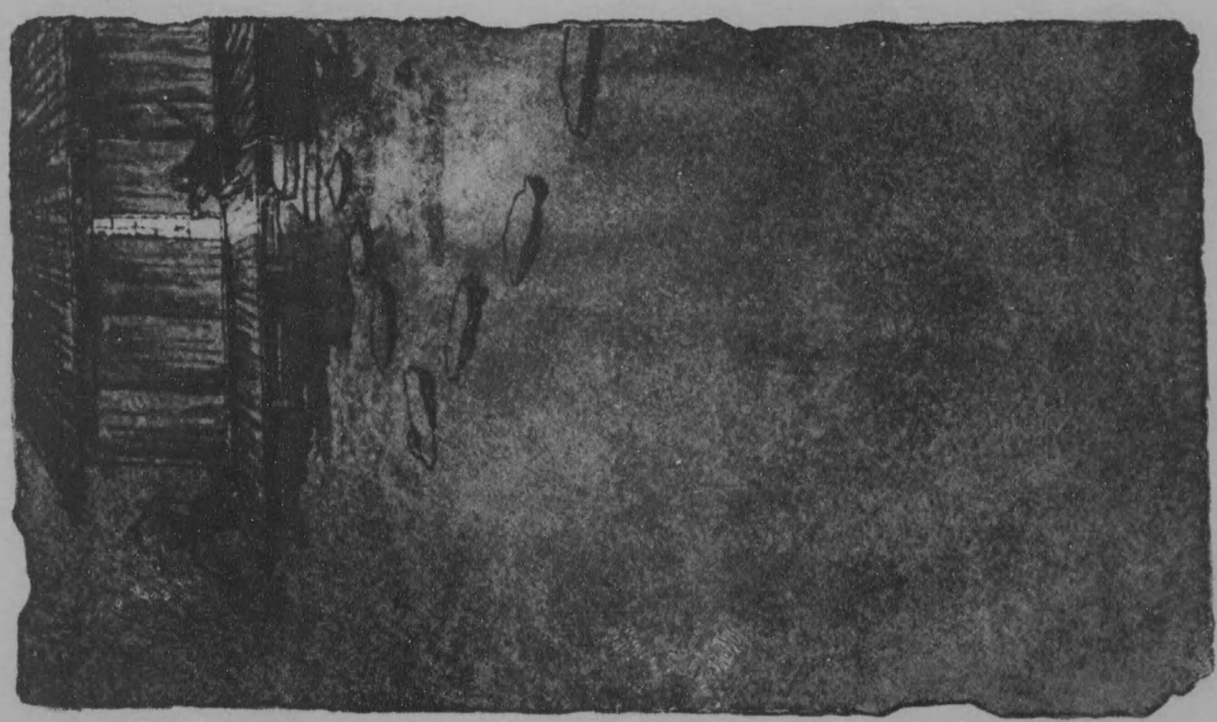
一ッ橋の寓居にて

著者　磯部秋蔭識

目次

小池塘（出雲）
時雨の松（摂津）
石鄽確現（伊豆）
孝地水とメンパ淵（飛弾）
鬼娘（下総）
藤頂淵（紀伊）
お辮の滝（越後）
産児の足跡と賽の川原（常陸、丹波、佐渡）
犬神（伊豫）
法恩寺（武蔵）
玉垣の石の数（河内）
黒神と赤神（陸奥、羽後）
西行峠（甲斐）
音戸の瀬戸（安芸）
火の柱（下野）

[illegible] （上 [illegible]）
[illegible] （[illegible]）
[illegible] （[illegible]）
[illegible] （[illegible]）
[illegible] （[illegible]）
[illegible] （[illegible]）
[illegible] （[illegible]）
[illegible] （[illegible]）

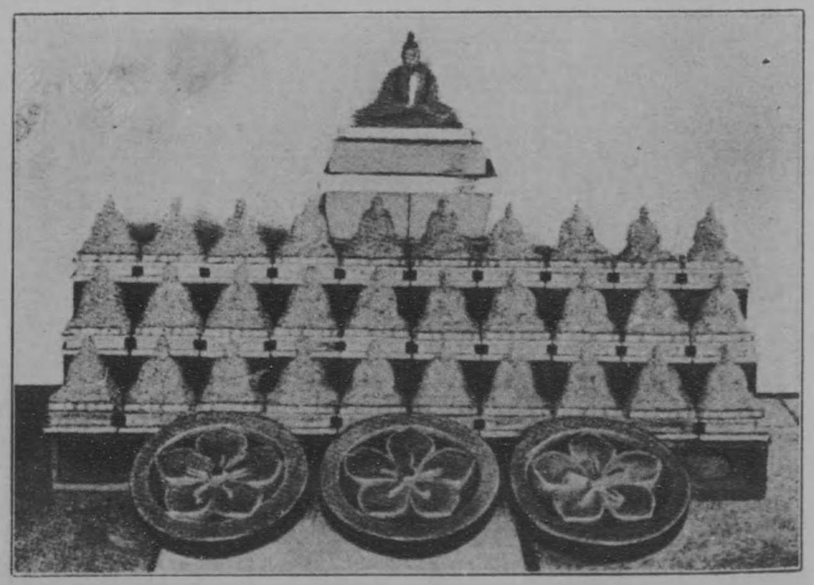


[illegible]

鬼娘

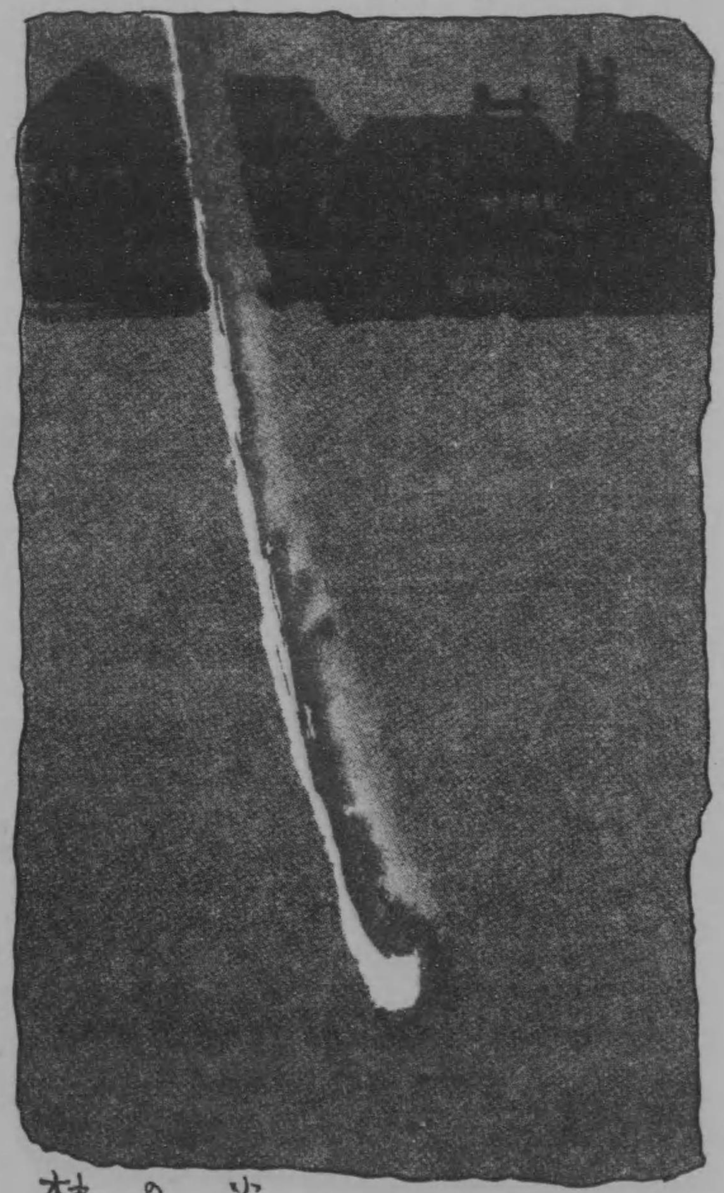
お雛の瀧

法恩寺趾のある大手町



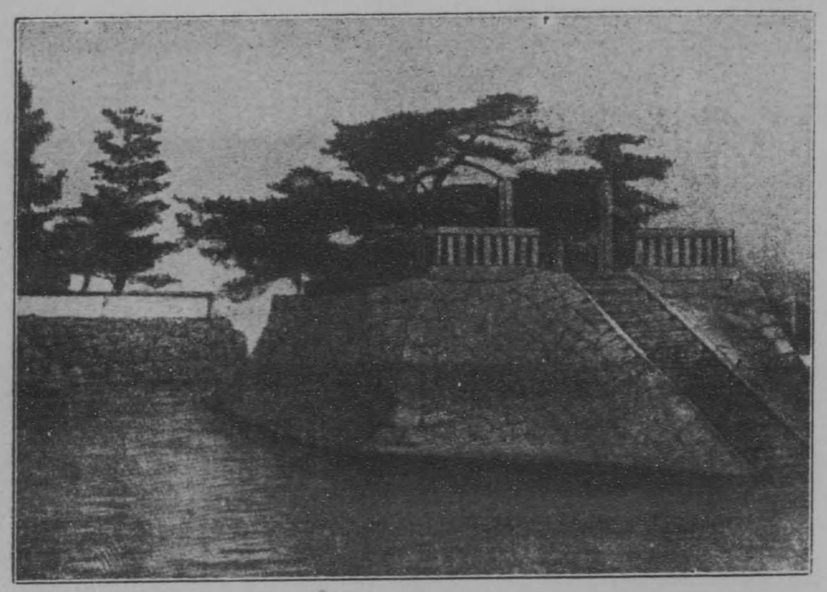
上段は太田道灌の像他は三十番神
太田康資兄弟此番神の前にて密談す

黒神と赤神



柱の火

御　　塔



船頭可愛いや音戸の瀬戸で
一丈五尺の櫂がひわろ
し

池邊
の
松

小池婆

（上）

草履取りの武助が、主人小池六太夫から、一日の暇を貰つて、田町の屋敷を出たのは、寒い正月の末であつた。

日本海の荒海を過つた寒風が、中の海で一度凍つて、粉雪を降らす。

天主閣が、雪空に美しく浮立つて、追々、松江の城下が淡暗くなつて來る。

粉雪が、霙になつた頃、武助は、檜山の森に懸つて居た。その森に梳られた北風が、饅頭笠を椀がうとする。反射的に、爲せまいと押へる。そして、横樣に酷く打當る霙を避けながら、凭れる如うにして、森の中を急ぐのであつた。

久々の暇を貰つて、懷かしい母や妹に逢へるのであるから、歸れば、斯うも云はう、あゝも云はう、又、この土產物を出した時には、何んなに喜んで呉れるで

あらうと、色々な空想を描きながら、城下を急ぐ。で、取り分け寒い今日の日も武助にとつては、人々が思ふ程にも感じなかつた。

漸つとの事で、森を出た。宍道湖の響きか、それ共、中の海の音か、沖鳴りがして、轟々と物凄い。何時しか、檜山の森も、後ろに小さく見える。その時には寒い風も、冷い霙も、薄らいでゐた。武助は、解けかけた草鞋の紐を直し、合羽で包んだ土産物を原の如く振り分けて、淋しい田舎道を足早に急ぎ往く。

そのうちに、古志原の里に着いた。眼に映ずる凡ての置物は、思ひ出多い昔のまゝ、嬉しげに武助を迎へてゐる。「同じ出雲の國でも、此處と彼處とは、斯うも違うものか。十三歳の春、亡き父に伴れられて、小池の御主人様に預けられ、武家一通りの御奉公の御指南まで、心を配られて茲に九年、眞實の親も及ばぬ御心添への程を思へば、噫、勿體ない事である。父は、十六歳の秋、此の世を去り、その時、御主人様から、初めての里歸り、武を錬る爲には、家戀し、親戀しではならぬとの御教訓、それから今日の今日までは、一度として歸つた事のない我が身、日頃の文通だけでは、心許なくとは思へど、之も是非なき事、然し、昨日の妹からの手紙では、母が病いだけで、何んなに病いのか、詳しう書いてはなし、御主人様に、伺へば、兎に角、久々の事であるから、歸るがよいとの御許し、又、附け加へて云はるゝには、顔が見たい爲の遠慮の手紙故、別に、心配する程の事でもあるまい、何れにせよ一度、歸つて見るがよいとの仰せ、御主人様の御言葉通りであれば、こんな嬉しい事がないが」と、色々、心に想像を廻らして、漸くに鎮守の森へ來た。それから、餘り深くもない藪を越すと、懐しい母の家へは、一丁もないのである。

昔馴染みの勝手知つたる我家の事であるから、一番近い裏の物置小屋の横から、破れかゝつた竹垣を越へて、表に廻る。今日の寒さに、戸口を閉めたものか、堅く閉して殊更に佗しい。武助は、何に感じてか、静に涙を拭ふてゐる。

『阿母、武助でございます。只今歸りました。』

家内では、妹のお政が、はッと氣附いて、言をも云はず、戸口を開く。開く瞬機に見合す顏。

何時の間にか、空は、晴れて、冷い月が淋しく光りを投げてゐた。

それから、暫く經つて、笑ひ興づる聲が、外に漏れて來る。時ならぬ春の花が武助の家に咲く。

(中)

案の如く、母は、何の變りも無う、六十の老人には、達者過ぎる程忠實々々しかつた。昔語りに、久々の憂きを晴らし、村の幼友達等を訪ねたり、訪ねられたりして、惡戲盛りの失敗談に時を移すのであつた。人氣が絶へると、水入らずの三人家内が強い嬉しさから、亡き父の事を想ひ浮べては、せめても、武助の此の健氣な姿を見せたいものをと、母や妹の思ひ出に、武助も共々、淡い悲しみに沈むのであつた。明日は、主人の登城日と云ふので、やがて、その夜は、家内が、枕を列べて、樂しい寢に就いた。

武助は、黎明に起ぎ出でゝ、又の休暇を約して、惜しい袂を分たねばならなかつた。また、此風を沿びながら、松江の城下を指して歸り行く。

母の情けの小田原提灯も、途中の強い風に吹き消されて、道は、殊更に暗い。辿る如うにして漸う漸うの事に、あの怖ろしい檜山の森に來た。村から市へ通ふ野菜車の轍を便つて、右に折れ左に曲りして、凡そ森の中程迄來たかと思ふ頃、十數間前方に水色の光り物がする。軈て、それが、近付いて來る。そして、時々、異樣な鳴き聲がして、一入物凄い。ふと後ろを透かして見ると、何時集つたか、同じ光り物が、入り亂れて近寄つて來る。その鳴き聲は、梢を走る秋風の如うであつた。

武助は、消えた提灯を投げ棄てゝ、近くの松の大木に手を着けた　手が着くと

逸早く枝から枝へと登りゆく。然し、悲しいことには、此の樹は、離れて立つてゐたので、他の梢へ渡る事が出來ない。「この檜山には、狼が居ると幼い時から聞いてゐたが、矢張り眞實であつたのだ。先刻母や妹が止める言葉のうちにも、ちらと其の注意もあつた樣だ。武士の家に奉公する身の、獸類に追はれたとあつては、御主人は愚か、世間へ耻づかしい。此の道中指しは伊達には指さぬ。ウム然うぢや、あの中へ飛んで下りて、斬つて斬つて斬りまくり、狼退治をしてやらう。假令一匹なり共、その首を持つて、御主人への土產にすれば、御賞めの言葉が懸るに相違ない。さすれば、仲間の奴にも、顏が利き、その上、あの意地惡の五平奴にも都合よし。」胸に問ひ、胸に答へた武助は、次の下枝へ足を掛け樣とした。

その時である。二三尺足下まで狼が搔き登つて來たのは。いくら暗いと云つても、よく〳〵見れば、姿形は、ほのかに見える。即ち、巧に、肩車を作つて茲まで登り着いたのであつた。

武助は何んなに驚いたであらう。眞か狼奴がと思つたに違いはない。然し、今は、事實である。所が狼の方では、今一息で武助に咬み付けると云ふ間際で、その數が盡きてゐた。武助では、もう一枝下りると、頂上の一匹に届くが、それでは、届き過ぎて、悠々下りるに先を越される憂がある。烏の如く、眼ざす枝へ甘く、飛び下りる事が出來るなら幸であるが、何を云ふにも、眞の闇、夜が明けるには、まだ、一と時もある。

兎角うする中、狼の一匹が、小池婆と叫んだ。

一瞬の隙もなく、頂上の狼の肩を臺にして、鏡の如うに眼を光らした一匹の烏猫が、大口開いて、武助目懸けて飛び付かうとした。間一髪、武助も去るもの一刀拔く手も見せない。白い光りが、闇を破つて、猫の前額に飛ぶ。

それと同時に、異樣の響き。

金鐵の裂ける音か。

その音が梢から、根株に移つて、猫の姿と狼の影と共に掻き消す。

軈ては、東が明るむ。武助は、血を拭つて鞘に納め、ほつとする。何處かで、田舍家の雞が、微かに啼く。そのうちに、松の緑が美しく見えて來る。靄を通して、冷い朝風が心を洗う。

槍山の森に朝が來た。

枝の附根に腰を下ろして、右手で頭上の小枝を握つてゐた武助は、靜かに、見下してゐる。武助は、微笑として悠々と地上に下りる。そして、身を整つて、森の中に眼を通す。ふと、足下を見る。その時、武助の眼は光つた。

『オヤ、こりや、茶釜の蓋。お屋敷の、ウーム』

御坊の太鼓が、明け六つを告げてゐる。

（下）

六太夫の母は、昨夜、便所に行く途で、何ものにか蹉躓て、眉間に怪我をしたと云ふので、騒いでゐる。又、臺所では、茶釜の蓋が見えぬとて、探し廻る。

武助が未だ歸つて來ぬので、主人六太夫は、中間の五平を代理に、家の騒ぎを妻に預けて登城する。

一方、武助では、御主人のお伴に遲れたので、屋敷へ歸らず、その儘、お城へ足を急いだ。夕刻の下城を待つて、その理由を物語らうと、息も急々、伴待所に入る。そこには、嫌やな五平奴が、他の屋敷の中間共と、笑ひ興じてゐた。

『五平、御苦勞だ。遲くなつて濟まない。實は……』

『ヤッ、武助、今頃何だい。そして、何が實はだ。俺には、俺の役があるのだぜ。阿母に合ひたい、妹に會ひたいのつて、親しい妹や、可愛い阿母だらう。ヘン』

『何を云ふだい。それ所ぢやないのだ。少し、深い理由があつてのこと。手前等に分つて耐るかい。』

『何が、何うしたと、深い理由、人を馬鹿にするない。叮嚀な禮の一言でも云ふかと思へば、顏を見るなり、五平御苦勞だ、又、遲れたには、深い理由がある聞いて呆れらあ。』

その時、祐筆中江勇之進の中間、作藏が、聞き兼ねて、仲に入り、特に笑ひ顏を作つて、口を開く。

『まあ〳〵兩人共、よいぢやないか。五平の云ふのも無理はなし、武助の怒るも一理がある。兎に角、此處は、俺に、委して呉れ、何れ、今晩、部屋を訪ねて更めて飲まうと思つて居るんだから、皆んな、然うぢやないか。』

一同の中間も、作藏の言葉に伴れられて、仲に入る。酒と聞いた五平奴、少し氣嫌が直つたものか言葉を軟げる可笑しさ。

『イヤ、皆がそう云うてくれると、何共、云へないや、同じ屋敷に奉公してゐる武助と、斯んな事云ひたくないが、挨拶が挨拶だからなあ』

武助も、相手にする奴でないと悟つたので、別に何事も云はずに、裾を下ろしてゐる。やがて、世間話に時を移して中間氣質を浮き立てる。

下城の刻限になつた。一同は、それ〳〵自分〳〵の主人を迎へに、同意する。

武助は、五平と共に、主人を待つ。

檜山での出來事を、落ちもなく、聞いた六太夫は、心に感ずる點があるので、切りと道を急ぐのであつた。武助の物語りを初めて、耳にした五平、今更、體裁惡相にすご〳〵と着いて行く。

武助が持ち歸つた茶釜の蓋が、主人六太夫にとつては、實に意外であつた。そして、猶更、決心を强めたのであつた。

その日も暮れて、九つを打つた頃、老婆の寢所を伺ふ一人の武士がある。それは、六太夫であつた。母は、布團を被つて、呻いてゐる。その樣子は、實に不思議で、常の母と全く異つてゐた。拔き足差し足で息を殺して、竊び寄つた。折よ

しと見た六太夫、二尺五寸の業物を床も通れと刺通す。

刹那の叫び、刹那の悶え、家鳴り震動するかとばかり。

その物音に、家人は、眼醒める。そして、俄に手燭が走る。足音が亂れる。斯くして、この部屋に集つたのであつた。布團の中には、眞黑な古猫が犬程な體を怖ろしく横へてゐた。

北風が、戸を叩く。

時雨の松

攝津の兵庫に、濱の寺と云ふ法華寺がある。源平時代には、既に海水に浸つてゐたと傳へられてゐる。朝と夕方には、太鼓の音が柏子木と混つて喧しい。

此の寺の前を少し離れた所に、二抱へ程の松の木がある。別に、格構がいゝと云ふ譯けではないが、珍らしい事には、葉が何れも、此れも、下に向いてゐる。で、遠くから見ると、時雨れてゐる樣で、何時とは無しに、時雨の松と云ふ樣になつた。

これだけでは、餘り不思議でも無いが、奇妙にも、この落葉を、集めて、燃料にでも爲やうものなら軈て、震ひが來て、大熱となり、甚だしいには、死に至ると云ふ。

清盛の時、未だ、福原へ選都の事が無い頃、何處から何處へ往く飛脚か知らぬ

が、伍次五郎と云ふ男が足の疲れを、此の一本の松の根株で休めてゐた、丁度、晝時分が來たので、空いた腹を肥やさうと、腰の包みを解いて、中から、握り飯を出した。止せばよいのに、松の落葉や枯れた小枝を集めて、火燧を取り出して漸う〳〵それに火を點け、握り飯を燒いて腹を肥やした。

それから伍次五郎は、一ぷく喫つて、茲を立たうとした所、急に、寒氣がして來た。そして、震ひが止まぬ。變だとは思つたが、勇を鼓して、近くの一軒家まで來た。何うしても震ひが止まぬ。遂に、眩暈がして、前が眞暗になつて來た。

此の家の主人が、ふと、之を見て不思議に思ひ、飛んで出て、自分の肩に縋らして內へ伴うた。伍次五郎は、そのまゝ、口が利けなくなる。主人も、厄介とは、思つて見たが、乘り掛けた舟と諦めて、止むなく妻に床を延べさして、看護をしてやつた。

その夜の丑滿時、此の家の裏戸へ、バラ〳〵と石を投げる音がする。主人は、飛んで出て見たが、別に、之れと想ふ人影も見へない。四邊は、至て靜で、松の梢を吹く風の音ばかりであつた。仕方が無いので、また、床に就く。床に就くと再び、前と同じ音がする。主人は、また〳〵床を出やうとした。

『貴方、駄目ですよ、時雨のお松さんの行爲よ。』

『何を云ふ、左樣な事が、馬鹿々しい。』

『屹度です。貴方が、昨日助けた飛脚さんに祟つてるのです。切戸の秀太さんも、丁度これと同じ目に會つたと聞いたぢやありませんか。』

『ウーム』

『ウームぢやありませんよ。ですから、飛脚さんの年と姓名を聞いて、油揚げでも供へて上げなさい。私が、茲から、謝辭つて置きますから』

『お松さんかい。』

妻の某は、勝氣な女と見へて、裏口から、大きな聲を出して、その理由を述べ

た。不思議にも、それから、悪戯をせぬ。

夜が明けた。明けるを待ち兼ねた夫妻両人、直ぐさま、伍次五郎の枕邊に行き、昨日茲へ來るまで、あの松の木の所で、何か爲なかつたかと訪ねて見た。すると、伍次五郎は、思ひ出した事を、切れ〴〵に話した。両人は、道理で昨晩あんな事になつたと今更の如に、時雨の松の祟りを怖れた。それから、油揚を供へて、名と年とを云つて、謝つてやつた。その夕方、伍次五郎は、床を離れる事が出來たので、夫妻に、厚く禮を云つて、

『此の御恩は、決して、忘れませぬ。何れ、私、主人に詳しく物語つて、更め、御挨拶に參ります』

と、涙を流して、茲を出た。

其後、此の附近へは、一軒増え二軒増えして、兵庫の街を作つた。土地の或者が、發起となり、松の根株に、小さい祠を建てゝ祀つた。

此の附近の人々は、時雨の松の祟りではない。あの根に、棲んでゐる、古狸の行爲であると、今も、怖ろしがつて居る。そして、その狸の名をお松さんと稱んで遂に、時雨の松のお松さんと云ひ出した。

所が、このお松さんに就て又面白い話がある。それは、時雨の松の近くへ、軒が續いて、兵庫の街を作つた時の事である。

神佛を非常に信仰する一人の老婆が近所に住んでゐた。朝はまだ日の出ぬうちに起き出でゝ、近在の神社佛閣を日々の仕事の如うに、廻り歩いて、七ッ時にはちやんと家へ歸つて朝食を濟ますのが習慣であつた。

毎日の如うに、老婆が神佛詣りを終へて、我が家へ歸つて來た。常ならば、家の者が膳を立てゝ、老婆の爲めに据えてあるのを默つて食べるのであるが、その朝に限つて、何うしたものか、キョロ〳〵として、食べやうともしない。果ては難題を持ちかけて、家の者を困らす。その中にも訝かしいと思はれるのは、生揚

けが食いたいと云ふ一事である。家内の者も變だとは思つたが、云ふがまゝに買つて來て與へた。老婆は、何事も云はず、むしや〳〵食べる。それから、俄かに裸體になり出した。人々も彌々訝しいと思つて、靜かにその理由を尋ねて見た。すると眼をクル〳〵さして、然も、身を震はしながら、

『私を誰だと思ふか、時雨のお松さんである。毎日〳〵此の家の老婆が親切に、詣つてくれるが、別に私の好きなものを供へて呉れないから、催促の爲めに今朝、共々行つて來たのだ』

これを聞いて此の家の者は、急に怖ろしくなつて來たので直ちに、供へ物をすると云つて、老婆から去る事を切りに願つて見た。すると、老婆は、

『それでは、今から歸るから、裏の切戸を開けて置いてくれ。』

と云つた。それで、此の家の一人がその云ふ通り開けてやつた　老婆は急に俯した。それから何の事もなく、元の老婆に返つたと云ふ。

石廊權現

（一）

江戸で鮭を積んだ千石船が、相模の田浦で一晩泊つて茲でも、種々と荷役をして、朝早くから相模灘を南へ走つた。

褐色の朝の空が、伊豆七島を浮き立てゝ心地がよい。船頭の濱五郎は、小手を翳して石廊崎の淡雲を眺めてゐる。東風は暖く吹いて眞帆に當る。舷を敲く潮は白い泡を散らして後ろへ〳〵と消えて行く。

『親方、俺、朝飯食つてねえから今食るよ』

今迄、艫で舵を操つてゐた船子の一人が叫んだので、空ばかり見てゐた濱五郎が、ふと吾れに返つて、後ろを顧みた。

『ぢや、俺が代つてやらう。早く濟ますんだ。遠州沖に變な雲が出たから』

『えッ、何處に』

船子は、今朝からの好天氣にまさか、變りがあらうとは信ぜられないが、日和見には親方には叶はないと思つてゐるので、一時は一寸驚いて見た。然し、濱五郎が心に懸けてゐる程でもなかつたのか、指さゝれるまゝに、輕く見やつて、そのまゝ、下の方へ行つた。

船は、波を切つて相模の沖を心地よげに辷つて往く。大島の鼻も何時しか過ぎて、早くも、稻取の村々が、手に取る如うに見えて來た。

(二)

心配でならなかつた濱五郎も、下田の港へ着いた時、錨と共に、やつと胸を撫で下ろした。

下田では、運送問屋の嘉兵衛親子に、その知人數名を乘せることになつた。船が荷役を終へるまで、外に、二三の同船者も出來た。其の中には武士も混つてゐた。

是等乘客の多〳〵は、上方見物に出掛ける者で、濱五郎が、前の寄港の時から約束して置いた人達である。千石船は蒼天丸と云つて、江戸の鮭を浪速まで運ぶ大膽な船であつた。

この船は、下田の港を出れば、怖ろしい遠州灘を乘り切つて、風の都合により何處へも寄らず、浪速へ航海するのである。で、天氣の模樣、その他の準備は、茲で、落ちなくして置かないと、怖ろしい災難の憂ひがある。然し、濱五郎が操つてからは、今迄に、決して誤つた事はなかつた。嘉兵衛は濱五郎に賴めば、それこそ親船に乘つた氣持ちで、別に、海上の心配は無かつた。他の人々も、濱五郎の腕はよく知つてゐるし、又、嘉兵衛の强い言葉に、動かされて、東海道を徒歩で上るよりも、樂である事を喜ぶのであつた。

一方、濱五郎では、茲で見る天氣は、五日も六日も前の加減を考へねばならなかつた。それは、船頭としての最も六ケ敷いことである。蒼天丸の中には、江戸からの客と、嘉兵衛等とを合せて十三人の乘客がゐる。

（三）

準備は出來たが、天氣の具合が面白くなかつたので、其の翌日は、空しく下田の内海で過ごした。夕方から雲も散つて、潮の流れも都合よく、映えた夕陽が、和いだ海面を照した。やがて、暖い春風が、黄金の縮緬皺を作つて、麗はしい下田の夕べとなつた。

『皆樣、此の都合ぢや、今晩中に出船そうと思ひますで、御承知を願ひます。』

濱五郎の言葉に、一同は承知した。そして、昨日から送つて來た人々も、その時刻に、小舟に乘つて、各々、惜しい別辭を交換すのであつた。それが濟むと陸を指して歸つてしまつた。

そのうちに、帆柱を上へ辷る帆桁の音擦れが、船下まで響いて來た。それと同時に、四つの重い錨は、水を離れた。斯うして三十五反の帆が張られた。

十幾人の船子共は、濱五郎の指圖に、船板を音立てゝ忙し相にする。風は後ろから吹いて、船は眞帆で走り出す。

多勢の客は、暗い行燈の影に集つて、切りと話し出した。船は、下田の入口に掛つて來た。

風は、誂へ向きで、然も、波が無い。其の上、潮に乘つて居るので萬事都合がよい。愈々港を南へ出た。

船は、矢の如うに早い。石廊崎の燈火は、權現樣が、照らして、航海を容易にする。

その光りが、幽かに見え出した。

(四)

伊豆の石廊崎の鼻先には、削つた如うな岩山がある。その半腹に祠が淋しく建つて居る。それは、石廊權現と云つて、この鼻先を航海する數多の船の水案内として、祀られてあるのだ。俗に、漁師の神樣と云はれて居る。

蒼天丸では、濱五郎が多勢の客に向つて、

『御客樣方や、只今は、名代の伊豆のお鼻へ掛つたのでがす。あの燈火が私等の守護神で、石廊權現と申しやす。皆樣も、海上無事を禱つて下つせい』

云ふかと思ふと、濱五郎はじめ舟子等までが、海上安穩を禱つて居る。多勢の客も、それに伴れられて、吾れ知らず、手を合はした。然し、今一人の武士は、嘲つた如うな風をして舳に立つてゐる。拜禮終つた濱五郎が、此の體を見て、大層怒り出した。

『お武家樣は、何故共々願つて下さらぬ』

『拙者は、拙者の一存で居る事、お前方の知る所ではない。』

濱五郎これを聞いて、憤然として、

『何を仰つしやる。權現樣は私等にとつては、命の神樣、またそれ許りではない。萬一にも、この船に故障でも起らうものなら、矢張り、お前樣達の難澁ぢや無いか。假令、お前樣はそれで良いにしても、一端、この船へ乘つた限りは、船の掟を知つて下つせえ。外の御客樣達は、後生大切とあの通り拜んで下さるぢやないか。』

(五)

濱五郎の言葉を耳にした武士は、呵呵と笑つた。

『成程、お前の云ふのも一理は無いでもない。然し、心から拜む氣で拜まない者

を、強いて拜まさした所で權現樣には、心がよいとは思はれぬ。拙者も、今迄に心が向かないで、神樣に手を合はした事が無い。全く、拜禮せし事無しとは云はない。唯、その折々の心持ちで之を爲すと云ふのぢや。決して權現樣に意恨あつての事では無い。船頭衆そうではないか。』

『其れは、お武士、御量見が違います。假令、貴方の理屈通りであるにしても、私等の船は、其れは容しませぬ。鄕に入つては鄕に從へと云ふ事を御存じか。』

『何ッ何と申す。拙者を何と心得居る。音無しく貴樣の無智を撓めて遣はすに、言葉を返すとは無禮至極、今一言申して見やう。』

『何だと、御客だと思ひ、事分けて話すに、俺が云ふ事分らねえか。武士が何うしたい。刀が怖くて、この腕一つで、遠州の灘が越せねえや。斯ッ、斯ッ、俺も昔は紀州樣に仕へて、一握でも御扶持を貰つた人間だい。』

多勢の客は、何うなる事かと、はら〳〵して居た。嘉兵衛親子も、氣が氣で無かつた。

船は、愈々、石廊崎に來た。其の時は、風も亂れて、波も高かつた。月は消えて、眞暗い。

（六）

『阿父樣、早く行つて靜めておやりなさい。濱五郎は氣かぬ氣な奴だから、何んな事を仕出すか、分らないし、お武家では、未だ若い所を見れば、何んな無分別が出ないとも限らないと思ひますから、貴方が早く、仲へ這入つておやりにならないと騷動でも起れば、他々の人達が御迷惑でございます。』

嘉兵衛は、忰嘉太郎の言葉に、道理と思ひ、多勢の人を分けて、つか〳〵と前に進み、最初濱五郎に向つて口を開いた。

『これ、濱五郎、お前は何と云ふことだ。彼方は天下のお武家樣では無いか、船

頭の身分で餘りぢやないか。』

嘉兵衛は、濱五郎の云はうとする言葉を遮つて、靜かに横へた武士に向ひ、いと叮嚀に言葉を掛けた。

『何方かは存じませぬが、何分、口喧しいは船頭の常と思し召し、茲の所は私に免じて、御納めを願ひます。御挨拶が後で、甚だ恐れ入りますが、私は、御承知の如く下田で乘り合ひました者で、同地で運送問屋をして居ります。山口屋嘉兵衛と申す下卑者でございます。』

『いや、これは〳〵痛み入つた御挨拶、拙者は、一寸仔細あつて名乘り兼ねるが此度探ぬる者あつて、武術修業方々江戸に參り、其れより、東海道を旅して、心當りがあつて、下田に來り、兩三日逗留致せし者にて、一昨日、蒼天丸の便を知つて乘船致して御座る。』

（七）

其の武士は、尙も、言葉を續けて、

『先程から申す通り、濱五郎どやらの言葉も一應、理のある樣なれど、何分、心より起らぬ信仰は拙者とても面白からず、また石廊權現に對しても、拙者の輕薄なる行爲を良くは取られるまいと思ひ、あの如く、腹立て申した譯けなれ共拙者とて、大人氣無い、それとなく承知致せば、良きものを、之れも若氣の誤り、態々仲裁の御身に對して、耻ぢ入る次第で御座る。』

『よく分りましてございます。失禮ながら、お若いに似合はぬ御寛大の御言葉、嘉兵衛、却て、お耻づかしうございます。生意氣の樣ではございますが、今時のお侍には、珍らしい貴方樣の今の御態度、仲へ這入つた嘉兵衛も、これで、顏が立つと云ふもの、これ、濱五郎、今の御言葉を聞いたか。餘り粗々を申し

上げるでない』

濱五郎も、不承無承頭を搔きながら、暫く俯してはゐたが、よく考へて見ると武士の言ふ所も、成程と思はぬでもなく、又、日頃、御贔負に預る旦那の御意見もあるし、茲は音無しい方がよいと思つたので、

『えゝ、よく分りました。これも、御客樣が大切と思ひ、口汚く申したこと。お武士樣、先きのことは、何卒この沖へ流して下せい。』

その時、蒼天丸の動搖が大きかつた。

（八）

船が石廊崎の沖を通り過ぎぬ中に、俄の大雨となつて、風が強く吹き出した。それも、風の方向が、西北の間から吹き付けて帆が利かない。船は益々動搖して怖ろしい。

濱五郎は元より、多くの船子共は一時の驚きに上を下への騷ぎ。濱五郎は憤發となつて、船子等を使ふ。

『松ッ面舵だ〳〵、今は面舵でないと惡い。』

『親方、面舵ぢやお鼻が危いや。』

『糞ッ、お鼻へ突當る位にするんだい。』

濱五郎では、この風の方向では、唯さへ、沖へ〳〵流されるのであるから、今は、面舵でないと眞直ぐに走る事が出來ないと思つたのである。

『萬一、取り舵にでもすりや、船は沖へ散らあ』

如何に千石船とは云へ、遠江沖からの黑い大盤紆の爲めには、思ふ樣に進めぬ。帆が利かない全くの反對風であるから、濱五郎は、進まうとはせぬ。殘念だが、もう一度、下田へ引返さうと決心したのである。然し、この時は目當てにする方角さへ分らなかつた。石廊權現の燈火は大暴風雨の爲めに消されて影もない。

轟き渡る海の音は耳を掩ふばかりに物凄くなつて來た、舷に打當つて碎け散らす大浪の響きは、大地震に破壞する甍の音の如うである。

俄かの大荒れに、乘客は魂消つて身も心も慄ひに慄つた。立つたり据たり、決して、一所には靜生と出來なかつた。

(九)

濱五郎等は、濡れ鼠になつた。そして、船の上を四方八方に奔り廻つて、その操りに活いた。

然し、それは無駄であつた。自然の力は、如何な濱五郎の腕を以てしても、所詮、動かす事は出來ないのである。船は、愈々、石廊崎から數里沖へ流された。このまゝ往けば船は何處へ着くか分らない。着陸すれば何よりであるが、萬が一にも、暗礁にでも出會ふものなら人々は、鮫や鱶の餌食である。濱五郎の心の中は、火の車の如うだ。遂に耐り兼ねて客間へ降りて行つた。

『旦那樣方に申しますが、迚も、之れでは下田へ歸れまいと思ひます。先き程、船の上で爭つてる中に、夜の天氣に氣が付かず、權現樣の事に氣が取られて、遂にこんな事になりましたのです。皆樣、何卒か私に命を下つせい。然し、最後の御禱りをして見やしよう。私は私は……あゝ……申し譯がございません。』

濱五郎の熱神な言葉と、其の覺悟を決めた健氣さに感じてか、今度は、先の武士が、濱五郎の前に行き、

『濱五郎とやら、心配する事は無い。石廊崎の權現に誠、利益のあるものなら、玆一番、命懸けの祈願をして見るのだ。唯、徒らに禱るだけでは、信が屆かない。誠の信心は、自分の衷心より是非を論せず出たので無ければならぬ。拙者も共々禱つて見やう。』

（十）

この武士の今の話に、一同、力付いて、異口同音に、然うする事を願つた。武士も、其れに應じて、溜水の水に身を潔めて口を嗽いだ。濱五郎も、一同の者も其れに伴れて身を潔めた。然し、濱五郎は、武士の先の言葉を尙考へて、再び問うて見た。

『然し、旦那樣、何う云ふことを申すんで御座います。何だか深い御考でも有りさうでございますが、私にはもう一つ合點が參りませぬ。』

武士は薄く笑つて、

『道理の問である。外でも無い。此の船に取つて、命とするあの大きな帆柱を、石廊崎の權現樣に献納するのだ。』

『えッあの大切な帆柱を。』

『アッハ、、、、今に至つて何と申す。白痴者、此の儘なれば、貴樣が大切と思ふ帆柱は元より、多くの一命に關はるを知らないか。帆柱は、又、購め得る事も出來やうが、命は再び返らぬわい。それで、海が靜まらぬ其の時は、天命なり。今更、狼狽するに及ばず、潔よく船と共に果すまでゝある。拙者等は兎も角、貴樣等の如き船で往き來を業とする者は、斯くして相果てゝこそ滿足と云ふもの、恰も武士が戰場の花と散るが如きである。幾百金の帆柱も人命には代へ難いわい。』

（十一）

『成程、仰せ誠に御道理。ぢや、皆樣何卒宜敷う御願ひ致します。』

多勢の客も、命には代へ難い。今は、何んな事をしても助かるものならと、名身を改めて、石廊崎と思ふ方へ向つて祈願を籠めるのであつた。

濱五郎も、今は、詮ない事と諦めて、後日、浪速より江戸に引返した上で、必ず帆柱を献納する事を石廊權現に約束した。そして、心の底から祈つた。人々は、口々に宗旨々々の經目を上げて、一心不亂である。

船は、何處を何う漂うてゐるのか、動搖しながら流れてゐる。天空は眞暗で風は矢張り荒い。今は、船中、誰騒ぐ者もなく、經を唱へる聲と大暴風雨の音響ばかりである。

『南無大悲の權現様、この船が浪速より江戸に歸着ました曉は、必ず命の帆柱を献げますから、海上を静めさせ給へ、濱五郎一生懸命の御願ひで御座います。南無大慈大悲の石廊崎權現様。』

それに伴れて一同の者も口を揃へて、

『南無權現様。一生懸命の御願ひで御座います。何卒此度の荒れを静めさせ給へ。』

一同の前に座して居た武士も、同じ事を云つてゐた。武士の機轉が、騒ぐ凡俗の心を静めたとは、誰も知らない。』

（十二）

軈て、風も東北に變つた。雨も小降りになつた。然し波は荒い。

今迄、何事も云はなかつた嘉兵衛は、静かに座を立つて船上へ出た。忰の嘉太郎も續いた。そのうちに禱りも止んだので人々は、これから何うなる事であらうと矢張り心配は去らない。眞暗な船上に立つた嘉兵衛親子は、暴風雨が少し静まつて來たので大層喜んだ。

『阿父様、この模様では、暫くすれば治るかも知れませぬ。然し、あの若武士は中々の勝れ者ではございませぬか。』

『私も然う思つて居る。先程の濱五郎との爭ひから、云ふ事やらその態度などの落ち付き拂つた處は、並大抵の者ではないと感じて居る。あれが、通常の武士

なら、あの時、屹度、手打ちにするとか何とか云つて嚇すに定つて居るのだが却て、身の若いのを謙遜て、話を軟げてゐた。そして、私の仲裁に花を持たせた。然し、嘉太郎、武士はあゝ有りたいものではないか。又、私の考へでは、あのお武士は親御の仇でも討ちに出て居るのではあるまいかと思ふが。』

『然うかも知れませぬ。何でも、阿父様が御挨拶せられた時に、仔細あつて名乘れぬと云はれたと思ひます。あれから察するに確に貴方の御推量通りでせう。』

（十三）

怖ろしい暴風雨の夜も明け染めて、東が紅い。透き通つた水色の空を、切れ切れの黒雲が亂れて走つてゐる。そのうちに、波も小さくなつて船も靜かに動く。

やがて、朝日の出が青海原に輝いて、濡れた船板に光る。それがキラ〳〵として、昨夜の荒れを一度に忘れさす。人々の喜びは、何んなであつたらう。そして、武士の殊勝な心に厚く謝した。

『拙者の爲めでは御座らぬ。それは近頃迷惑千萬、拙者に禮を云はるゝ暇に、石廊崎の權現様へ感謝せられよ。此の和ぎになつたは、神の力でなくて何と爲う。』

若武士は、決して、取り得ぬ。彼は、日本武士であつた。一同の人々は元より濱五郎、嘉兵衛親子の感じは、猶更彌増した。それは扨て置き濱五郎では、流されて來た海の上を切りに考へ出した。考へるのも無理は無い。今迄話には聞き、また、始終近くを航海して居るものゝ、來たのは、今が初めてゞあるのだ。それは、大島を離れる事が、南へ三里の沖、薄く見える渚は、波浮の濱である。

『皆様、御蔭様でやつと命拾ひを致しやした。昨夜、もう少し南へ流されてゐやうものなら、迚も、方角の定め度が付きませぬ、また西へでも寄れば、利島の岩に碎けて微塵となるのでございました。權現様の御利益は大したものではございませんか。』

（十四）

一同の者も、濱五郎の言葉に、今更の如く感じたので、又々、石廊崎の方を拜んで、有難い利益の程を泣いて喜んだ。若武士は、元々、死を覺悟してゐたのではあつたが、この九死に一生を得た事を思つて、亡き父の靈に話す如うに心で云つた。『御父上、御安堵下されませ。不肖が武運も未だ盡きませぬか、危き一命を拾ひ、再び仇を探す身の上と成りました。如何に草根に竊むとも、必ず探し出し怨みを晴して見せます。之も、一重に御父上の御加護のあつたが故、何卒草葉の蔭にて御照覽下され。』船は舳を變へ、廣々とした眞白の帆を追手に張つて海原を蹴つてゐる。

兎角うするうち、幽に石廊崎も見えて來た。昨夜に變る上天氣、船は矢よりも早く、遠江沖を走つてゐる。伊豆の山々も、何時しか後ろに消えて、富士の高嶺

に雪が白い。暖い春の太陽も斜に射して爽かである。

『御武家樣、只今、下では、命拾ひの大酒盛が始まつて居ります。大勢のお客樣達が、貴方がお居でにならぬ故、祝盃が廻らぬと申して居いでゝございます。それで私に、是非共お招き申して來いとのことで參りました。取り分け、山口屋の旦那樣が、無理からでも、御願申して來いと云ひ付けられました。何卒、早速、お仲間入りを願ひます。』

若武士は、莞爾として、そのまゝ足を移した。

（十五）

三晩四晩と過ぎて、船は恙なく浪速の浦へ錨を下ろした。人々は、それから後は、思ひ〳〵の方角に足を向ける。若武士も旅の裝束を固めて、上陸した。山口屋嘉兵衛は、つか〳〵と、若武士の側近く進んで、言葉を掛けた。

『お武家様、誠に失禮ではございますが、お宿りは、もうお決定でございますか。一寸御尋ね申します。』

『いや、これは嘉兵殿で御座るか、別にこれと申して定めた宿は御座らぬ。』

『無躾でございますが、手前共が親戚も御座います故、誠に汚苦しい所ですが共に御出では願はれますまいか。又、仇の在所……。』

『えッ』

『いえ、何さ……片々面白い御話しもして、あの怖ろしい石廊崎での出來事も、多勢の奴等に聞かしたい心算でございます。又、店の者は、町人に珍らしい武術が好きでございますから、何や彼やと旅の淋しさが晴れて、嬉しうございます。同じ船に乘つて、長旅したお互は親戚も同様、いや、是れは、失禮を申し上げて恐れ入ります。兎に角、何卒、御同道が願ひたいものでございますが、如何なものでございませう。』

『左様で御座るか。色々と御厚切の御言葉恐縮の至り。では、甚だ申し兼ねた次第ではあるが、宜敷お頼み申す。』

（十六）

若武士は、嘉兵衛が見込んだ如く、親の仇を討つ武術者であつた。緣は異なものである。嘉兵衛の出店で厄介になつて居る中、仇敵板倉が備前に居るを聞いて嘉兵衛その他の者に厚く禮を遍べ又の再會を期して、倉皇玆を發足したと云ふ。

× × ×

却説、一方、船頭の濱五郎では、既に危い處を助かつて、やつとの事で、浪速へ着いて、荷上げも濟ましし、その夜は、船子と共に、浪速の遊廓で暮らした。翌日からは、江戸へ運ぶこの地の荷物を積むのに忙しいので、惜しい袂を分つて、馴れた蒼天丸へ歸るのであつた。それから三日ほど積荷に忙しかつた。

その間、暇ある毎に、浪速の地を遊び廻つてゐた。遂に荷役も濟んだので、又〳〵長い航海に上るのであつた。山口屋親子も、今度の事で、船は懲り〳〵だと云つて、乘らなかつた。何れ、東海道を辿るのであらう。

で、浪速の里から乘船する所の數人の客を入れて、朝早くから愈々、東に向いて進んだ。今度は、別に變りも無く、幾日かを費して、江戸へ着いた。

蒼天丸が江戸へ着いてから、色々と船の手入れに追はれて、二十日餘りと云ふものは、航海しなかつた。それ以來濱五郎は、石廊權現の帆柱献納の事は衽にも出さなかつた。

（十七）

月が變つて五月となつた。少し強く動くと、淡い汗が出る初夏の頃となつた。船の繕ひも出來たし、取引の荷役も數多集つてゐた。濱五郎は、船子を呼んで、

再度の浪速行きに取り掛つたのである。然し今度は、下田へは寄らずに、伊勢の津へ寄る約束であつた。

毎度の如く船は江戸を出て、例の伊豆のお鼻へ掛つて來た。所が、不思議にも今迄空に一點の雲もなかつたのが、俄に大暴風雨となつた。その荒れ樣は、以前に增す大荒れで、大波は海の呑ん底から顚覆つて來る。然も、大雷雨で物悽い光景であつた。

そして、轟然たる大音響と共に、帆柱は根本から折られた。然し、折られたが姿が見えぬ。船は、それから何處へ行つたか流れに流れてこれも行き方が知れぬ

その後、引續いて、三日三晩と云ふものは、近年に稀れな大暴風雨であつた。石廊崎に住む漁師共は、權現樣のお怒りだと云ひ出した。然るに、四日目の朝、蒼天丸の帆柱が、石廊權現の岩下に打ち上げられて居た。土地の漁師共を初め、その他の人々が、寄つて、權現樣の祠の土臺に献げた。

それは、今に至つて變りなく在る。然も、岩と岩との間に、横に掛け渡してあるから、迎ものことでは、登る事が出來ない。それ故、人々は、一筋の蛇の如うな細道を、峯の上から下つて參詣するのである。その帆柱に數十枚の板が張つてある。その床板の隙間から下を覗くと眞蒼な深い海が見える。

そして、その千石船の帆柱と傳へられてあるのを、よく見れば、不思議にも、根元から捩ぎ取られた樣になつて居る。

然し濱五郎は何處へ流されたか。

× × ×

濱五郎が姿を見せなくなつてから、半年程過ぎて、その騷動を誰云ふとなく、其れから其れへと噂が高くなつた。石廊權現樣に千石船の帆柱が、捩ぎ取られてあるとの事で、近鄕近在は云ふ迄もなく江戸や、上方からの參詣者が多かつた。その中にも、山口屋嘉兵衛の耳に這入つたのは早かつた。痛く感じた彼は、幾十金かの黃金を寄附して、祠の建設に献納したと云ふ。

孝池水とメンパ淵

何故か門原左近は、郷里の近江に妻子を遺して、心ならずも、飛彈の益田は、中原村と云ふ所で、浪々する身となつた。その後、ふとした風邪が因て、遂に、高い枕に就いた。

夫からの便りが、久しく無いので、妻は、心遣る瀬なく、問へに問へたが、女の身として、飛彈の奥深き中原まで、何う行かれやう。十六になる實子右近に話をした、孝行者の右近は、母から聞かされなく共、小さい胸を痛めてゐたのであつたが、母を殘して行くにも、行けず、始終、思案に耽つてゐた所、母から、相談を受けたので、遂に、決心の臍を固めて、健氣にも、獨り旅路に上つた。山越へ、谷越へして、難澁な道中をも、父に會ひたさ、母に喜んで貰ひたさに、夜晝の區別なく、軈て、中原村に着いたのである。然し、父の變つた姿を見た時は、

何んなに、嘆いたであらう。況して、親思ひの右近としては。

その時、左近は、重い口を、漸く開いて、

『右近か、よく、訪ねて呉れた。然し、此父は、迚も、今度は、助るまい。せめても、此の世の名殘りに、生れ故郷の琵琶湖の水を、一口呑んで死にたい。』

聞いた右近も、道理と思ひ、再び、道を返した。琵琶湖に至り、メンパに、その水を汲んで、急いで父の許へ歸らうと、やつとの事で、瀬戸まで來た。瀬戸は中原村から、一里離れた所である。その時、村の人に、父の死んだ事を聞いて、甚く悲嘆にくれた。態々、持つて來た水も、今は、無駄になつたので、其處に捨てた。右近は、力泣く〳〵、悲しい報知を母に齎さうと五六町後へ戻つたとき、ふと、手にしてゐるメンパに氣が付いて、

『あゝ、今は、用ないこと。』

と、其處の河淵へ投げ込んだ。近江へ歸つて、右近は、何う話したであらう。

また、この報知を聞いた母の嘆きは、何んなであつたらう。

それ以來、この中原村の人々は、大層同情して、右近を慰むる爲、左近を祀つて神となし、子供等に、秋の夜話しには、必ず云ひ聞かしてゐる。

右近が、遙々、琵琶湖から持つて來た水を、瀬戸村で捨てたのが、後日、池に化して、土地の作物を養つて居る。そして、何んな雨降りの日でも濁つたことはないとも云ひ、又、濁るのも、澄むのも、増すのも、減るのも、常に、琵琶湖の水と調子を合せて、然も、天候には、關係がないとも云つて居る。

メンパを捨てた淵を、今は、メンパ淵と稱へられ、孝池水と相俟つて、不思議な話を遺してゐる。孝池水は、直徑半町足らずの小池で、後ろの山は、餘り高くはないが、前の松原と景色を色採つて、水が清い。

この村は、元より、近郷近在でも、門原左近と云へば、誰知らぬ者も無い。供物、幟など、賑かである。又、メンパとは、獵師、樵夫等が、用ゐる漆で塗つた

長形の辨當箱の事である。

門原村は中原村の一部で、左近が死んだ所、それは、村の者共が、彼を憶うて自然に稱へて來たのが、門原村になつたのである。

鬼娘

（上）

銚子の濱風が、冷やりとなる頃、筑波の山に朝霧が靉靆く。すると、漁師共では直ぐに、

『秋になつた。ぼつ〳〵鮭獲時なるだ。』

と、其處此處での評判がとり〴〵になる。

その頃、銚子の濱では、秋が來ると、鮭が群を作つて集つて來る。それで、こゝに住む、漁師共の一年中での大切な活き時となるのである。同じ仲間に、藤太夫と云つて、一際腕利きの漁師があつた。然し、腕は利いても、網一つ持たぬ。船等は、思ひもよらぬ事であつたのだ。

銚子の秋は、銚子の漁師を一年養うのである。その大切な秋を、腕拱いてゐる

者は、一人も無い。況して、他人十倍の腕持つ藤太夫。

『お時、今迄は、他人様の漁を手傳つて、汝と細々暮して來たが、例年の秋が來たゞ。この時、せめても、俺の網で、獨り儲けがして見たいや。』

『お前、そんな事云つたて、仕方が無いぢやないか。』

『だけど、何うにか工風がつくまいか。』

『そんな無理云つて……あつ喜十さんに頼んで見やう。そうだ。』

『有難い。一つ頼んで見てくんねい。』

妻のお時は、姉婿の喜十に、色々無理を云つて、何うにか、やつと、古網を一張り借りて來た。藤太夫は意外に喜んで、その夜は晩くまで、網の繕ひに餘念がなかつた。

夜半が、少し、過ぎた頃、何うやら、繕ひ終つたので、床に就いた。夜明け前から、雨が降り出す。風が強くなる。その中、大暴風雨となつて來た。

『藤太夫、藤太夫。』

枯枝が落ちたのか、近くで強い響きが大暴風雨に混る。

『藤太夫、藤太夫。』

ふと四方を見ると、いつに見馴れぬ一人の老人が立つてゐる。藤太夫は、變に思つて、

『この夜更けに、何の御用かな。』

老人は、何とはなしに、淋しい面持ちであつた。靜かに口を開いて、

『折角寢んでゐるお前を起したのは、折入つての頼みがあつてのこと。何を隠そう、私は、此の銚子の沖に、年久しう棲んでゐる數多の鮭の王である。お前も知つての秋が來た故、例年の樣に、私が眷族共は、各々、子を産む爲に、利根川を上つて人知れず棲場を見付けねばならぬ。それで、愈々、明日の暗夜に定める樣にと申し渡して置いた。凡そ、此の世に生きとし生けるもの、皆、親と

して、子の可愛いないものはあるまい。それには、人間も、魚類も變りはない筈である。幾何萬の眷族共が、懷胎の體して、遙々と產みに行くのである。私が賴みと云ふのは、茲である。明晩一夜だけは、何うか、網も張らず針も入れずに、大勢を助けてやつては呉れまいか。殺生が渡世とは云へ、其方にも、涙はあらう。私が心のうち、眷族共の幸不幸を察して、何うか、同情して呉れるやう。呉々も賴むぞえ。』

老人の聲が、漸々、霞んで來ると共に、姿が薄らいで行く。

『ウーム、ウーム。』

『お前さん、何うした、え、』

『藤太夫は、やがて、眼を醒ました。その時は、既に東が明かつた。その夜の不思議な夢も打ち忘れ儲け大切と氣が氣では無かつた。

早くから起き出た藤太夫は、網の用意をして、利根川口に至り、その夜の來るまで、何や彼やと仕度に氣を配るのである。

昨夜からの暴風雨に、他の漁師達は、將かと思つて、誰一人も漁には出ない。却て、藤太夫が出懸けるのを止める程であつた。

愈々その時刻が來た。川口を張り切つて、待ちに待つてゐた。軈て、時よしと覺つた藤太夫は、其處此處の網を上げた。漁れたは、漁れたは、幾何千萬の鮭の群れ。

彼の喜びは、云ふも、愚か、お時の滿足は狂氣の如であつた。斯うした彼は、俄かに、銚子きつての大長者となつたのである。

その中に日が經つた。

（中）

俄長者の藤太夫の家では、妻のお時が懷胎した。今迄子無しでゐた兩人では

今の身分になつて、子が出來るのであるから、何んなに嬉しい事であらう。然しその喜んだ事もほんの束の間である。月滿ちて出産た女の子は、普通の子供では無かつた。脊から腹にかけて、鱗の如うな肌で、然も、鮭の腹にある赤い痣が全身に散つてゐた。取り分け、顏から手足の痣は、殊更に色彩つた如うに鮮明であつた。一目見て、慄然としない者は無い

母のお時は、産褥で、我が子の姿の異樣なるを見て、俄かに逆上した。

『鮭の祟り……鮭の祟りだ、王樣の祟りだ。』

と、口走つて、狂ひ死んだ。

此の時の藤太夫の驚きは何んなであつたらうか。此の時の藤太夫の悲しみは何んなであつたらうか。

然し、子を思はぬ親は無い。片輪の子程尙可憐さが彌增さる。適當な乳母を附け、掌中の珠の如うに育てるのであつた。親の涙は有難い、この鬼の如うな子にも、幸多かれと、常盤色なす綠子と命名けた。

鱸て、蝶花と育てるうち、鮭の上り下りの數も過ぎて、明けて、二九の春を迎へる娘盛りとなつた。綠子は、物知る頃一度わが顏を知つてからは、その後決して、自分を鏡に照した事がない。或日、何とは無く、鏡の前に座つた。そして、この淋しい部屋で、人知れず涙に暮れて、我知らず親を怨むのであつた。何故、斯んな慨嘆ない姿であらう　假令、その日生計でも、滿足に產みつけられた娘子でありたい。この慄ろしい長者の私が恨めしい。人間に生れざらましなばと鏡と話したであらう。實に、綠子の兩眼からハラ〳〵と落つる涙は、千萬無量であつた。噫、花も羞らう二九の乙女、天は何の故に斯くは、惡戲するか、眞に鮭の祟りならば、何故殺生した、その主を苦しめないか。惡神か善神か。綠子は、遂に其場へよゝと泣き伏した。

窓から漏るは、沖に歌ふ漁師の聲か。

× × × × × × × ×

長者の鬼娘の評判は、村から村へと響いた。銚子の濱はもとより九十九里濱では、誰知らぬ者も無い。

沖通ふ船板一枚地獄の船頭さへ、船と船との出逢ひには、必ず銚子の濱の鬼娘を尋ねるのであつた。

『オイ、あの鬼娘見たけえ。肌は鱗で顏赤輪、眼は車輪で水飴だ。あれに抱きつかれりや、眼を廻さあてえんだい。』

いつしか夏も過ぎて、鮭が上る秋風の吹く頃となつた。藤太夫の屋敷の奥へ離れ座敷が新築された。そして間毎に、眩惑ばかりの金襖が嵌められた。何でも、達者な繪師を賴んで、この上、部屋を飾りたいとて適當な人を物色してゐた。十月の中旬になつて京都の土佐光賴と云ふ繪師が松岸の町に逗留してゐると云ふ事を耳にしたので、態々、使を立てゝ、是非共一筆願ひたいと懇願して見た。繪師は、早速く承諾して、藤太夫の屋敷へ來る事になつた。軈て、繪筆を走らして、好みのものを畫いてゐた。

鬼娘と人に侮られる程の姿をしてゐても、心は、他の乙女に變りはない。綠子も人間である。女である。然も、娘盛りの最中である。

心では、光賴の優さ姿を思ひに思ひ、腹では、光賴の優さ心を刻みに刻んではゐれど、ふと我れに歸つたとき、遣る瀨なき身の不運を詫つのであつた。然し戀の焰の前には理性がない。眞驀らに風を切る鏑矢は、何物をも見ないで破らねば置かぬ。

『光賴樣、お茶召し上られませ。』

『これは、お玉殿、御氣使ひ有難う存じます。』

『酷う、お精が出ますこと。』

『痛み入ります。』

女中のお玉は、何か樣子ありげの風情。光頼が、一口喫つて、直ぐと繪筆をとる。

『今日は小春日和で、沖の眺めも、格別でございます。』

『左樣でございませう。私も、先程、筆を置く毎に、沖を眺めて、景色に光惚れて居りました。』

お玉は、取り着くに、端緒を失ひ、心の中で迂路々々とするばかりであつたが遂に意を決して、

『あの、お嬢樣から、光頼樣へのこの短冊、何卒御覽下さいまし。』

光頼は、お玉のこの動作や、この言葉使ひが何だか變だとは思つて見たが、將か受取らずには居られないから、餘儀なく手に取つて、軈て、始終を讀み終つて驚いた。正しく戀歌の一首であつた。女中では、光頼が手に取つて讀むのを見屆けて、そこ〳〵に座を立つて去つた。一方、繪師の光頼では、青くなつて心は振へ何うしたものかと、兎つおいつして、二三日と云ふものは、心憂く送つた。四日目の朝、主人の藤太夫は、光頼の部屋に入り來り、いと叮嚀に挨拶をして、

『實は、貴方に、折入つてのお願ひがございます。外ではございませんが、娘の綠は、近頃、何うも樣子が怪しいので、注意するとは無しに氣を付けて見ますると、それとよく分りました。親の口から、何だか變な事を申す樣でございますが、あの不束な上に、持つて生れた醜い顏姿、御氣に召さないは當然なれど女房にすると思はれず、人間一人救つてやると思はれて、何卒娘の思ひを叶へてやつて下さいませ。滸烏しいお話ですが、淋しい田舍家とは云へ、船もあり、家屋敷もある、銚子の長者でございます。總てを貴方に、進ぜませう程に、茲の處、哀れと思し召され御承知の程幾重にもお賴み申します。』

『成程、よく分りました。然しながら、故郷には親もある事故、妻持つには、私

一存では成り兼ねます。で、今姑く御猶豫を願ひます。』

『それは、御道理のお話、詮ない事ながら、何卒よろしく御願ひ致し置きます。』

藤太夫は、腋下に冷汗を出しながら、娘を思ふ親心に駈られ、依頼に依頼してこの場を去つた。

さても、光頼では、愈々、困つた事になつて來たこのまゝでは、大事を起すより外にない。何うしてあの化物娘を妻られやう。と繪の間に獨り考へ込んだ末、その夜の明けぬ中、長者の家をそつと抜け出て、濱邊に行き、自分が日頃穿き馴染んでゐた草履を渚に置いて、元の松岸へ逃げ歸つた。

神ならぬ身の昨夜の中に、光頼が抜け出たと云ふことは、長者の家の誰一人も知る者がなかつた。然し、夜が明けて、光頼が居ないと云ふので、家の者は、探し出した。家の者の心配より、緑じは、狂氣の如うになつて諸所を探し廻つた。そして、渚に行つて、戀しいと思ふ光頼の見馴れた草履が一足海に向つて落ちてあつたのを見付けて、嘆きに嘆いた。

『光頼樣、貴方ばかりは殺しはしませぬ。斯うなつたのも、皆な私から起つたこと、必ず冥土へ行つてお詫び申します。』

と、緑は、一圖に光頼が、身投げしたと思つて、深い怒濤へ身を躍らした。

『お嬢樣が、あれ、身投げを……』

と、遠くから見てゐた家内の者の一人が叫ぶと共に、上を下への大騒動となり舟を出して、所々方々と探してみたが、分らない。その中、二日經ち、三日過ぎて、七日目の朝、その醜い死骸が、光頼の草履を堅く持つたまゝ、渚に打ち上げられてゐた。この變つた姿、このいぢらしい身裝を見たときは、流石の藤太夫も今更の如く、鮭の祟りの怖ろしさに、身を震はせた。

（下）

緑が亡くなつてから、未だ四十九日も經たなかつた。藤太夫の使つて居る漁師がその持船を繰りながら、銚子の沖を約そ一里餘も出た。

不思議にも何時の間にか、夕陽が西の端に臼搗いてゐる。

『熊ッ、今日は、何だか急に日が暮れた樣だねえか。お日樣は、もうお這入りだ』

『ウム、妙だ、朝早くから出て、茲へ來る迄に僅か一里半そこ〳〵だになあ』

『變だねえか。』

『兎に角、仕事に懸らう。』

熊吉、長兵衞の二人の漁師が、話をしながら、網を下してゐる。半ば頃まで、下したとき網が浮いて沈まぬ。重い沈金が流れて意の如くならぬ。

『オヤッ、此奴は變だ』

『變だ、オヤ〳〵』

二人は、氣を急つて切りに沈めに掛つて見たが、矢張り沈まぬ。軈て、薄氣味惡くなつて來たので、詮なく網を上げ、艪を槽ぎ出した。海が一面の眞紅と變る。そして強い潮流が河流の如に走り出す。二人は、青くなつて震へながらも、一生懸命である。實に、船の廻りは血の海であつた。船は追々〳〵と沖へ流れて行く。如何な腕利きの二人も、今は力が絶きて疲勞が增すばかり。何うにかして岸へ槽ぎつけたいものと思ふが、この怖ろしい流れには到底敵せなかつた。仕方がないので、二人は、唯、天命を待つばかりである。船は、遠慮なく流れに乘つて走る。其のうちに、九十九里濱に沿うて流れ出した。一時半を過ぎて、大網村の漁師達に救はれた。二人は、九死に一生を拾つたので、嬉し涙を流して、當時の模樣を人々に語りなどして、吐息をつくのであつた。聞く者は、皆々、眼を圓くして非常に怖氣た。やがて、二人は、厚く禮を述べて、銚子へ歸り主人の藤太夫にも物語つた。

それから、二日目の朝、俄かの地響きがして、田や畑が龜裂て水が涌いた。ま

た、其の夕方に火事が所々に發つて町の人を騒がせた。

二人の漁師が大網へ流されてから、斯んな事が、引續いて出來るので、人々も何かと云ふと、大きく騒ぎ出す樣になつた。それからは、獨りとして安心に夢を結ぶ者が無くなつた。その後、十日ばかり大雨が續いた。利根川の中の堤が破れて、人蓄を流したのは、此の時である。その有樣と云つたら、修羅場も斯くやと疑はれる程でその慘狀は到底思ひ及ばぬことであつた。

洪水が止まつてから、惡疫が流行して、其處此處にバタ〳〵と斃れる。子供が神隱しに會ふやら花嫁が天狗に攫はれるやらで、銚子の町は迚も人の世とは思はれなかつた。

鬼娘の綠が死んで四十八日目、銚子の濱にまた〳〵赤潮が流れた。その色は利根川の下から出て沖へ幽かに消えてゆくのである。人々は、唯、次の天災を怖れるばかりであつた。愈々四十九日目に、海岸に不思議が出來た、それは、何千何百の魚類が昨日一夜のうちに、渚に打ち上げられてゐたのである。そして、利根の川尻にも幾千の魚が、腹を覆へして眞白になつて流れて來るのであつた。

銚子の町の人々は、遂に、長者の鬼娘が祟るのだと云ひ出した。此頃の如うに引續いて災ひがある如うでは、やがては、銚子の町も黑土となり銚子の濱も血の海となるであらう。あの鬼娘の怨靈が祟るのだと評判種々〳〵。其れから其れへと傳はつて、九十九里が濱の浦々へも響いた。

何時とは無しに、この噂を耳にして取り分け心配したのは、長者の藤太夫であつた。今は、娘の爲、自分の爲、引いては、銚子の人達の爲と思ひ、多くの漁師共を集めて相談した。それは、綠の靈を慰める爲に彼女の殘した齒と花櫛とを神體として『齒櫛明神』と名命け、長者の屋敷內に祠を建てゝその冥福を祈る事であつた。これには、誰も異議が無い。早速く綠子を祀る樣に決めた。

それから暫くして、銚子の町にこれ迄に無い賑かな祭事を營んで、綠の靈を慰

めた。藤太夫は、これには、財産の大半を放棄つて、有りと有らゆる施行をして賑はせた。

不思議な事には、この事があつてから、銚子の町には、何の障りもなく、至極平安に春秋を送る樣になつた。幾百年の年月が經つと共に、齒櫛明神が白紙明神と變つて、痣の神として有名となつた。また、緣結びの神として參詣する者が多くなつた。

上總の國銚子町の白紙明神に詣でた者は、必ず鬼娘の因緣談を聞かされるであらう。

生あるとき死を思ふ程の鬼娘も、死しては、萬世、人々の胸に生きて、白紙明神と成る。嘸ぞ地下では清く笑を漏らしてゐる事であらう。

藤槇淵

（上）

東は白んだ。

麓の庵をフイと出て、奔流る熊野川に沿ひながら、上へ上へと足を運ばせてゐる白髪の老翁、小笹の露に、白衣の裾を濡らして、とぼ〳〵と川の堤を朝霧に消へて往く。

茲は紀伊の在、熊野本宮の東、

奇岩、妙石、古木、雜草、その森嚴な深山のたゞずまひへ、木の葉漏れの微光が射して、碧の渦する淵を、層一層物凄く見せる。藤槇の初夏の朝朗け、

淵の彼方、絶壁の下、名も知れぬ大磐石が露に包まれて、天を貫く一本の槇の樹を支へてゐる。樹には、大藤が纏ひ、小藤が絡まり、遂に潭々たる水面にその

綠影を爭ふ。

この時、水の音律に調和した瀏亮の響きが、霧の中道を通して、神々しく聞えて來た。軈ては、萬籟一時に、靜まり返つて、宛然、太古の如う。

その槇の根本は、平な岩になつてゐる。それに端座して淵に向ひ、切りに、笛吹く老翁こそ、その頃、世にも稀れなる笛の名人、尾崎某が世を隱ぶ幽境の姿である。靈笛の音は、如何な蓋世の勇も、如何な聰明の智も融和せられて、自然界に泳ぐ。

天然の藤棚は、老翁を覆うて山氣を防ぎ、淵下の流音は、笛の音と合うて神氣を皷舞する。

やがて、日輪が、山の端を色採つて來た。霧は紫に、黃に、淡紅に、遂に薄らいで、ほの〴〵と淵の底を見せる。底の小砂利は黃金色に光るかと思はゞ白銀色に輝き、又、灰色に煙ぶる。笛の音に流れも淀みてか、小岩に囁く響きも消え

靈笛の音ばかりは、一しきりの嵐氣に連れて、槇の梢を動遙ぐ。

と見れば、一段下つた岩面に、數十の鹿の群が、靜かに首を傾げて腹這ふてゐる。ゆるやかな朝日を浴びて身動きもしない樣、實に、狙仙の筆、匠の鑿。

曲べは、大淵底にまで抑揚して、悠々、大氣を沈める。晩咲きの椿の花が、はら〳〵と散つて、水面に漂ふ。

何時しか高野山は、雨雲に閉されてゐた。その餘雲が那智山から走り來る新な黑雲に併合されて、猛鵬の如く西から南からこの仙境を指して駈けり來る。

淵は、陰々として、水底を隱し、俄かの寒氣が、幽谷を侵す。老翁の秘曲は、律を亂さず、將に、神に入らうとする。

鹿は、互に脊を列べて集ひ來る。その中の一つ、軈て、耳を立てゝ黑豆の瞳眸を散らす。又、一つ、三つ二つ、五つ、遂に突如の動亂となつて岩影に走る。篁村に隱る。岩間を飛ぶ、古木の森に逃れ往く。

老翁の白髪、老翁の袖、鋭く淵を指し、淵に靡く。然し、靈曲の律には、亂れがない。嵐は、彌増して來た。後ろの古木は、相摩れてごう〳〵と騒立つ。水面は、颯と大皺を作つて、岩岸を打つ。そしてさゞめく。木の葉が、雪と散り、雪と飛ぶ。

水輪は、淵一面に、此所に波動し、彼方に波動して、漂ふ木の葉を踊らす。やがて、一陣の強風が、猛虎の嘯きをして、狂ひに狂ひ。雜木は、唸りを生じて、暗雲に包まれた。然し、曲べは亂れたらうか。

枯れた槇の小枝が、老翁の左頰を敲いたとき、靜に立つて右手で裾を拂つた。

旋風、俄に起つて、その愛笛を淵へ奪つたのは、この時。

大粒の雨は、篠を衝く。

電光、暗を破つて、森を走る。

老翁の叫び、雷の響き。

笛は、悠々、暗き淵底に沈み行く。電雷交互西に東に物凄い。轟然の響きと共に、槇の古木に火柱を現した。瞬く隙もなく、白衣の姿が水面を飛躍した。水沫は、中空に散亂して、大雨を助け、大波紋は、強く動遙いで、二輪、三輪、五輪……

雨は、瀧津瀨と降りそゞく。風は、益々加はる。仙境は、修羅場となつて、轟き渡る。

萬山を拔く大暴風雨、

（中）

透き通つた外界から、五色の光りを受けて、珠を欺く艶々しい青疊を敷詰めた瑠璃の大廣間。黄金の音を響かせて、錦襴の布を織つてゐた花の如うな乙姫、靜かに、大空を眺めて、微笑んだ。

聽て、機を休めて、茲を立ち、水晶の如うな手を傍らの石の竈に着け、片手を優しく上げて、侍女を招く。一段低い次の間に控へてゐた可愛い侍女が早速く前に伏す。姫は、涼し氣な聲を漏らして、

『今朝程、見えた老翁は、如何にしてか』

侍女は、美しき顔を擡げ、細き聲して、

『浮藻様のお命令に依り、綠の間にお伴れ申して御座います。』

大廣間の兩側には、藤槇模様の段帳が吊してゐる。それが何時の間にか、一時に、消へて、數千の侍女が、花耻づかし氣に、正しく座してゐるのであつた。

月が光るか、日が射すか、周圍の瑠璃に輝いて、姫を浮きたてるその幽玄さ。燦爛とした陽氣もなく、また、陰鬱とした淋しさもない。唯、心神何處を駈けるかとばかり、姫は、再び笑みの唇を開き、

『では、御休憩か』

『いゝえ、姫様の御機の休みを待つて、お伺ひ申せとのことに、』

『然る事なら、御身、御苦勞だが、浮藻と共に、茲へお伴れ申して呉れまいか、必ず、粗忽の無い様に。』

『畏まりました』

侍女は、南の隅の帳を過ぎつて、玻璃の圓窓を右に折れ、綠の間に急ぐ。

その姿が、霞んだ頃、石の竈には、淡紫の氣が立つてゐた。やがて、何所からとなく、蘭麝の香が浮動する。また玲瓏の光りものが、乙姫を包む。然も、それが、多くの侍女の顔面に反謝して美しい。遂には、この靈氣を縫うて、琵琶の音が流れて來た。

彼の不思議の老翁は、何時しか、姫の前に伏してゐるのであつた。先の侍女は下つて元の座に着き、浮藻は、敬々しく、傍らに控えてゐる。姫は、何其云はず靜然老翁の様子にのみ注視する。老翁は、夢心地、唯、默然として首垂れて居た

が、遂に、顔を上げ、白髪の兩鬢を撫ぜて、

『笛が欲しさに、我れ知らず淵に入つたまでは、記臆して居りますが、見渡す所これは又、不思議、建物、風俗、凡ての情況全く見知らぬものばかり、茲は世に云ふ唐天竺の類でございますか、又、御身は、如何なる方か。』

『不審がるも御道理、實は、日毎に、御身が、槇の古木に凭つて、奏でる秘曲に心通ひ、折あらば、傍近う耳にしたきものと希ふ折柄、御身天帝の惡戯に逢ひ笛を持ち去られやうとせらるゝを、妾は如何にも、氣の毒に思ひ、故意と、古木の小枝を折り、心ならずも、左頰を打ち、その機會に、淵底へ持ち來りしもの、取りも直さず、之れ、此の石の篭に供へあり、疑ひ給ふな、嘸ぞ、疲れもあられやう。今宵は、緩りと別殿に休まれ、明日、何卒して、妾はじめ、一同の者へ、一曲奏で下さるやう。さて又、茲は、御身が始終來る大淵の底、妾は、此の世界を預るものにて乙姫と申す。若し、聞き屆け呉れやうなら、御身に長壽の齡を進せ申さう。』

老翁、はじめて、その成行を聞かされ、今更の如く呆然て、暫しは、言葉も出なかつた。石の篭に供へてある愛笛を見て、如何にも嬉し氣に、笑を漏らすのであつた。彼が、天眞爛漫は、水底の王國にまで通じたのである。

『危き難を救はせ給ひ、まだその上に、今の有難き御言葉、何とて、否み申しませうぞ、然りながら、吾れ、庵に、一人の男兒遺しあり、今日の大荒れを案じ必ず淵まで迎ひに來た事でありませう。吾が姿の見えぬを悲しみ、狂ふ樣、今も眼に見る如に覺えます。それを思はゞ、立ても居ても居られず。誠に不憫のこと、申すまでもなく、あの危難に、姫の御救助が無いときは、命を全うすることは、到底覺束ない事ながら、さりとて恩愛の情默し難うございます。王侯の豪奢の生活は無けれ共、親子の樂境は決して劣りませぬ。母亡き後は、男手一つにて育て上げ、今年十九の若者、然も、終日山に入り、薪を作り、翌日市

に出で、その責代にて食を求め、吾等を養うことを務めと致し居ります。せめても母在世ならば、雨の夜、花の朝、共に、倶に、談らば如何に樂しからうかと思ひ、子供が愛しう思はれ、思い出さずには居られませぬ。老後の愚痴も吾れ知らず出で丶申し譯け無き事、御寛し下されませ。』

『親子の情、然こそ道理、必ず御身の息子を回護う樣天帝にも通じ置かう。何れにせよ、今日も、早や、暮れに近し、今より中庭の藻綠殿に詣り、水神の女神に逢ひ、この世の水祭の模樣を御覽あれ、その後、今日の疲れを遊華殿にて勞ひ、明日一日、緩りと遊ばれよ、取分けそのとき、老翁が秘曲何卒願ひ參らす。』

『御優しき數萬言、唯、涙の外は御座いませぬ。』

瑠璃臺の水晶の珠の光り、姫の左右の玻璃と瑪瑙の花刻みの柱に映じ、眞紅の反射は、後ろの錦蘭に輝く紫の薄靄に交互して、追々に、この金玉殿を消して行く。

次の日が開いた。

涼しい水風が、中庭の緋鯉雌鯉の尾鰭に靡く。

青玉の唐松、綱玉の青柳、金糸の雜草、

五色の日輪、悠々と散光する。

軈て、寶玉を摩する麗はしき響きが、瑠璃の窓から流れて來る。金の鐘を亂れ打つ如う。白銀の盤が轉がる如う。それが、遊魚の群れを靜める。

斯うして、この日も過ぎて三日目の朝、老翁は、止めらるゝも聞かず、姫をはじめ、多くの侍女共に、分れを述べて、瑞玉の宮を去るのであつた。皆々と、惜しき名殘を談つて、一本の槇の根本までと、送り往く。

陸地を川邊に沿ひ、水の流れに足を進めてゐる一人の老翁がある。

夕日が梢に落ちて、ぼんやりと、深霧を通して來る。笛吹く老翁、宿は何處か。

槇の林を過ぎて、靜かに下流へ小さくなる。

（下）

『安兵衛さんや、今日は、麓の先生様の三回忌と云ふ事ぢや、お庄家様に、ちよつくら、聞いたて、喃う早いもんぢやないか。』

足の爪裏に、肉封いた黒土を、細い竹片の先で、穿りながら、相手の百姓に話し懸けた。一人は、丑時を濟ましてゐるのであらう。兩頰をもく〳〵さして、一方を見る。

『ほんに、治作どんの云ふ通り、三年振りだわい。親一人子一人の仲で、何うする事も出來ない所、村中して佛祭りをして下さるとは、息子さんの孝行が、天道様に届いたと云ふものぢや。』

『それも然うだが、先生様が、未だ、男盛りの時村の若衆を集めては、色々と人間の道を教訓説かれたつけ。それからと云ふものは、打つて變つた村の有様、隣村では、飛んだり躍ねたりした揚句、野卑びれた騒ぎとなり、仕事を怠るやら何や彼やでな、始終村騒ぎが出來るが、此の村の美しい事をお上様も聞かつしやつて、お庄屋様へ、色々とお賞めの言葉があつたと云ふぢやないか。それも、これも、皆、先生様のお蔭だないか。それを思へば、佛祭り位は、當り前の事よ。』

『そうだ、そうだ、然し、先生様も、亡くなられる前は、笛がお好きで、始終川上の大淵で吹いて、御座らつしやつた。』

『フム、笛で思ひ出す、俺等が、裏山で柴する時、何の響きだらう。隨分奇麗な音だわいと、不思議がつてゐたのだつた。それが、村での評判となつて、一編見届けて見やうと……』

『その時、御主が、あの曲り淵の手前で、雌鹿に出合つて、驚いて、大聲上げて奴鳴つたてなあ』

『お主も居たのかい』

『居たとも、松どんが、生擒つて歸つたらう。それから、お主は、迚も先導は出來ないと云つて俺の後の後へ逃げて來たときの顔と云つたら、氣の毒な程、蒼かつたい。あつは、、、』

『何を云ふぢやい、何でも、先生の仰しやるには、紺紙は、危い所へ貼るなと敎へられたからのことよ。宮角力の一つも取る俺が、鹿位に怖けて堪るものかい。』

『何を云ふだい、君子は油氣に近寄らずと云ふことだ。』

何時の間にか、一人は、八ッ茶を濟まして、鍬の柄に兩手を懸けて身を凭してゐた治作は、微笑々々しながら、煙管に藁心を通してゐる。やがて、通し終ると一二度、頰を腫らして、すつ〳〵と呼氣を强く吹く。

太陽は、早や傾きかけた。烏が三羽、柿の枝を蹴つて麓の森に急ぐ。

『然し、思ひ出しても、慄とするぢやないか、それ、先生が、亡くなられた日喃』

『うむ、あの大暴風雨の』

『然うよ、本宮の角のお鳥婆さん宅へ落雷て、到頭家諸共、燒け死んだ位だから何う思つてもあの槇の木が裂けてるのは、先生樣も、同じぢやないかと思はれる』

『村のものは、適切そうとしか思はないから、深山へ入らずに、あの日は、空しう歸つたのだから、今更、思うても、仕方が無い。』

そのとき、治作は、やをら身を起し、隣りの芋畑を耕す。それに伴れられて、安兵衛も動き出す。鍬の端が小石に當つて、カンと響く、又、土砂を抄うてザクリと音立つ。

名も知れぬ鳥が南へ飛んだ。

夕陽が茜さし、啞々の聲が淋しく聞えて來る。二人は、共に、仕事を終へて、笛の老翁の庵を訪ふことを約しながら、鍬を肩げて家路に着く。

夕榮は、靜かに溯らいでゆく。

刻一刻、黃昏るゝ。

續經の聲、鉦の音、佗しき庵の小窓から耳に入る、本宮を北に離れた尾崎老人の住家、灯點し頃の凉風が、淡い光りを明滅さして悲しい。

何處から、聞ゆるか、櫟ぐる如うな軟な笛の音が讀經の間に響く。

何時、誰が此の音を知つたか。そも、知らずにか。讀經の聲も止まる。鉦の音も止まつた。

『噫、吾れ程、儚い者は有らうか。二つのとき母を亡ひ、その後、父は、村の子供若者を集めて、讀書を指南し、親一人子一人の淋しき生活とは云へ、それも、去年の夏、天災に遇うて、現世に亡く、人々のお世話になり、野邊の送りを濟まし、如何はせんと、案じ居るうち、昨夜、夢に、龍神現れ、父の笛、久しう借りたり、今夕、共に俱に返すべし、禮として、父に千年の壽齡を與へ、汝に

無雙の武運を授くべしとて、五色の光りものに包まれて、掻き消す如く、熊野川上の方角に失せ給ふ。不思議な事もあるものよ。」と、讀經の間、過ぎ越し方を想うて、獨り、餘念無かつたそのとき、耳元へ、懷かしき父の笛の音が、靜かに響いて來るので、我れに歸つた七之助、讀經の治作、太八の爺を搖り止め、鉦敲く、安兵衛を注意して、經讀む聲、鉦敲く音を止めたのである。

『アレ……アレ……』

『七さん何うした』

まだ、耳に響かぬか村人達、七之助の物案ずる面持ちに、不審を抱き、七之助を攻める。

『アレ、また……笛が……笛が』

切りに耳を立てゝ、首を門口に傾げる。此の動作に、人々は、ふと氣付いた。

『先生だッ』

『アッ……先生だ……ウム……』

『おい、誰か見て來い。』

『いゝえ、皆様よりか私が迎へて參ります。皆様の御親切が、佛に通じて、笛で御禮してゐると存じます。』

『成ある程、』

『安兵衛さん何うしたんだい。ガタ〳〵振うてるぢやないか』

『治作どんは、堅くなつたよ。』

『何共ないぢやないか、話に身が入つて、眞心が出たのだ』

『安兵衛奴、敗け嫌いを云ふちよるて。』

『何を云ふか。俺は、何共ないが』

この時、入口の戸が開いた。

今まで力んでゐた太八爺、俄かに立つた。急に蚊帳に潜り込む。治作奴、待つてたと云はぬばかりそれに續いた。安兵衛も得たりと狼狽ふためいて、這ひ出す七之助氣の毒に思ひながら、

『皆様、誰かゞ、お詣りに來て下さつたのかも知れませぬ。急きなさいますな』

そう云つてるうちに、白衣の父が、圍爐の側に、ぬつと立つた。如何な七之助も驚いた。アッと水懸けられた思ひ、暫しは口も動かなかつた。

× × × × × × × × × ×

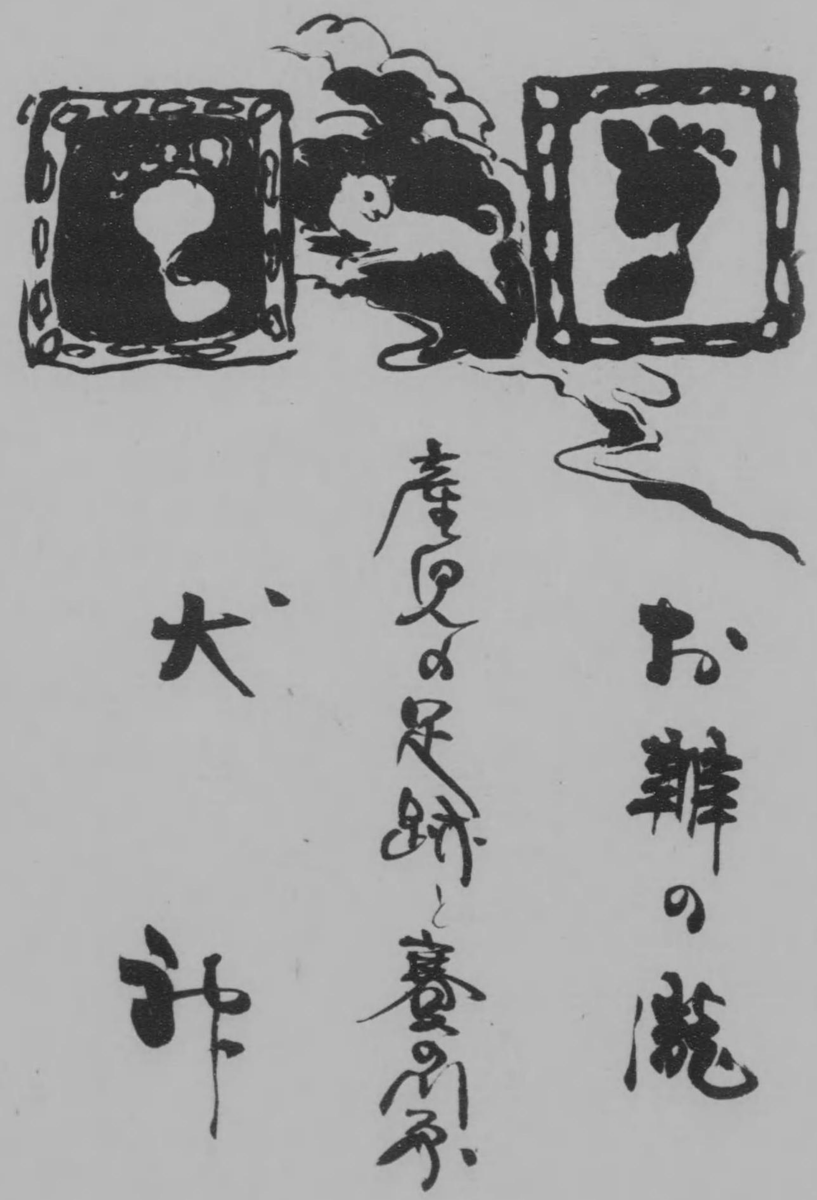
昨夕の出來事は、村一ぱいの評判となつた。七之助は、父から相不變、四書五經は元より、あらゆる軍書を授けられ、一方、武術に餘念がなかつた。それが新宮の城主に聞え、近侍となつて美しい孝子の物語りを遺してゐる。尾崎老人は、千年の齡を保つたであらうか。

淵は、それから、誰云ふとなく、藤槇淵と稱へる樣になつて、清い心の人のみ

は、今も、水底の石の竈を眼にすると云ふ。

槇の古木は、亂朶する藤の繁みと風を含んで、靜かに、笛の音を村人に聞かしてゐる。村人は、不淨な者は、玆へ來られぬと傳へてゐる。萬一、無理にでも、來やうものなら、風に散る槇の枯葉は、連つて、黑蛇となり、藤の長蔓は化して白蛇となつて、その人を驚かす。

そも、藤槇淵の龍神在りや無しや。



お辨の瀧

優しい男の心を知つたのは、可愛いお辨が、十七の冬であつた。まだ、その頃佐渡と越後との間には、舟の便がない。

けれ共、佐海の海女としてゞはなく、燃ゆる心のお辨にとつては、戀しい清吉に會ふ爲めには、假令、盥で渡るにしても、疊を辷るよりも樂である。

朝からの曇りが、夕方になつて、意地惡くも、小雨に變へた。その上、黑染んだ荒海のうねりを一入物凄く見せる。沖は、黑い幕を降ろし、軈て海を掩ふて來た。

雨は止んだが風が吹く

小波は、小波を合して大波に碎け、細い不知火を現して、波の姿を怪物に變へる。

お辨の家の上をまた、一しきりの雨が走つた。

其の時、既に、お辨は、裏の置場から、そつと轉がして來た毎夜の盥を浮べて佐海に漂うてゐた。夜は暗くとも、波は高くとも、番神岬の常夜燈に火さへあれば、お辨は取り分け平氣なものである。燈火を目當に漸つと岸邊まで漕いで來た。もう此の時には全然風も和いで眞圓な月が軟い光りを投げてゐた。常夜燈から一二間離れて黑い男の影が月光に浮いてゐるのが見える。それは云ふまでも無く戀しい清吉の姿であつた。彼は、この柏崎の者で、去年の冬、漁に出て、序でに佐渡の土を踏まうと仲間等と共に大橋の村から赤泊へ着いたのである。その時佐海の海女達が多く集つて色々親切に饗應した事があつた。その中に一際目立て愛嬌の溢れるばかりの乙女があつた。お辨は此の時始めて清吉の優しい心を知つたのである。夫婦約束をしてから、毎晩々あの番神岬の常夜燈を目當に盥で柏崎の清吉に會ひに行く樣になつた。

『私は、此の樣な荒れる晩には來ないだらうと思つては見たが、萬一と思つて毎日の場所まで出懸けた所、その中風も和いだ故、暫くは待つて見やうと、半時ほど前から茲に、居た。』

男の優しい言葉に、お辨は、擽ぐられる如うに嬉しい。その言葉さへ耳に響けば、今迄の荒い波風に漂はされた苦しさも、直ぐと消えて仕舞うのであつた。

『清さん、私が斯うして來るのを嫌と思はない？』

『何うしてそんな事思ふかい。嬉しくて、もう來ないか、もう來ないかと、時間が近くなる毎に、胸を踊らす位、それ程、待ち憧れて居るのだ。』

お辨の涼しい兩眼には、露が光つてゐた。そして去年はじめて佐渡で嬉しい夢を見た事を突然の瞬に電光の如う頭の中を走つた。お辨は震へて居る。清吉の右手は、その左肩に懸つて、お辨の後髪を靜かに上へ撫ぜた。

七月の月は、何時までも高い。荒い佐海の波も、冴えた光りに押へられて、凉

しい反射を番神岬の白い砂地に浴びせてゐる。やがて、二人の影が常夜燈から消えて幾度もの時が經つた。

『それでは明晩も構はない？』

『よいとも』

お辨はそれから、夜の明けぬ中にと、例の盥を轉がして、再び海の上に漂うた清吉は久しい間お辨の漕ぎ行く先きを見てゐる。月の光りが淡くなる。お辨は一生別れるかの如うに胸を騷がして、後見ながら後見ながら、波間に隱れて佐渡に歸つた。

朝の光りが、大海原の遠い彼方から、白く流れて來る。柏崎に夜が明けた。緣の松が枝に朝風が吹いて、小波は渚に歌ふて優しい。

お辨は其の後、幾夜ともなく海を渡つた。そして來る度毎に、

『清さん、一度は佐渡へも來たがいゝ』

と奬めて歸るのであつた。清吉はその時は、必ず、

『四十九里の波の上、私の腕一つでは行けない。』

と答えるので、お辨は仕方なく雨の夜も風の夜も毎夜々清吉戀しさに通うてゐた。お辨は日晝は、海の仕事に忙しい。海女の仲間も近頃のお辨の樣子を疑うてゐた。それから誰云ふと無く、柏崎の清さんに會ひに往くのだと云ひ出した。

お辨はそんな事は少しも耳にも入れなかつた。然し清吉では、最初は、何共思はなかつたが、お辨の思ひ込みの強いのと、熱神にこの荒海を渡つて來るのとに何とはなしに、怖氣が出て底氣味が惡くなつて來た。で、黃昏る頃、沖の方から來るお辨の盥姿を見て夜更けて歸る彼女の痛々しげを憾じる時、清吉は、我れ知らず心を震はすのであつた。

殘りの暑さも漸う〳〵去つて、涼しい秋の初めとなつた。空は透き通つて靑水晶の如う。軈て、黃昏れて來た。二三羽の烏が南の方へ急ぐ、その時、渚の白い

砂の上へ腰を下ろした清吉は、沖を見ながら小石を投げて居た。

沖の方に、小さい黒影がぽつんと現れて來た。清吉は凝視した。時々長い瞬きをして、じつと見入る。それから、首垂れて爪先に附いてゐる赤い小砂に眼が注ぐ。そして、悶える胸を強ひて抑壓へ様とした。けれ共、何うしても彼にはそれが出來なかつた。想が亂れて胸が轟く。お辨の影が人の頭ほどの大きさになつた頃、風が出て來た。追々と暗くなつた。何時の間にか常夜燈に火が點いてゐたそれは、清吉が小石を投げて居た時宮守が來て歸つたのを知らずにゐたのであつた。波は靜かに立つて又沖を見入る。

お辨の姿も見えなくなつて來た。空も曇つて來た様だ。もう半時も經てばお辨が渚に立つのであるから清吉は何うしたものであらうと氣も亂ろである。強い東風が一陣走つた。渚に音が高い。

耐り兼ねて遂に清吉は決心した。彼が常夜燈の光りを消した時は夢中であつた。

佐渡から越後へ渡るにはこの光りがお辨の命である。清吉はそれを知つて消したのだ。強い戀するお辨は、この光りが消えたのを何んなに思つたであらう。

肥えた底波がのたり〳〵と動き出した。お辨は目當を失つたので氣が亂れて力が盡きた。その中に、雨も混へて盥は潮に流れた。お辨では、何處へ漕いでよいかゞ分らない。やがて、暴風は車軸の雨に伴れて海を荒らす、針路に迷つてお辨は彼方此方に搓みに揉まれた。木の葉の如き盥は大浪に上つた。そして、奈落の底に入るかと思はる如うに直下した。その儘、お辨は盥と共に顚覆つた。

沖から陸へ、陸から沖へ風は亂れて吹いて、海は一際物凄い。

× × × × × × × × × × × × × × × ×

越後の柏崎から西へ凡そ二里、青海川の流れが海岸の絶壁に蹈外して、眞逆様に海へ落ちてゐる所がある。その瀧の下に女の冷い死骸が漂着してゐた。

昨夜の暴風雨に、お辨を乘せた盥は、今朝の噂を乘せて佐渡から越後の沖を潮に揉まれて流れた。

瀧は今も變らず音を立てゝ直下してゐる。寄せては返す日本海の荒浪に戰つて水沫を雪と散らして物凄い。何時の頃とはなしに、お辨の瀧と稱へられる樣になつた。

「來いと云たとて行かりよか佐渡へ佐渡は四十九里波の上」お辨の瀧に斯んな響きがする。

産兒の足跡と賽の川原

常陸の土浦に、殿里と云ふ所がある。別に、これと云ふ程の景色ではないが、細小小川の曲べと、素朴な田舍家が散在して居る樣は、又、瀟洒な眺めの一つである。

その小さい流れに、産兒の足と云ふのが懸つて居る。それは、丁度、赤子の右の足程の跡が、筑波山の方を向いて、暗黑色な凹みを殘して居るので、何か面白い由來談でもあるまいかと思つて、研究して見たが、別に記す程のまとまつた話もない樣である。

然し、古くから、その足跡が殘つてゐて、この殿里では、この足跡に溜つた水を取つて、夜泣きする子供に飲ませると、不思議にも、泣き止むと云つて居る。それで、諸々から、態々、その水を取りに來る者がある。そして、その左の足跡

は、筑波山の麓の神郡に在ると、所の者が傳へてゐる。

昔、土屋相摸守が、近臣を伴れて、この産兒の足跡を態々見に行つたとの事である。

國は、ずんと離れるが、丹波の國、何鹿在の物部と云ふ所にも、産兒の足跡がある。

犀川とて、流れは、餘り大きいと云ふ程ではないが、水が清うて、夏など一寸釣するにもよく、又、いゝ涼み場所で、土地の子供等が、遊びの隨一としてゐるこの川の岸には、隨分と、奇妙な岩や、形の變つた古木などがあつて、風眉を添へて居る。取り分け、巖松、谿石などが雜然として、得も云はれぬ所がある。その中にも、白岩と云つて、特に、切つ立つた大きい岩がある。然も、その根張りは、實に、二里餘に達すとさへ云はれて居る。

所が、この白岩にも、産兒の足跡があつて、その岩を缺けば、妙な事には、必ず、兒供の泣き聲が聞える。然し、この岩缺を、持歸つて、庭石や、石垣などに使はうものなら祟られる。それで、土地の者は、子供等に云ひ聞かして、少しも惡戯を爲せぬ。

次は矢張り子供に關係した話であるが、國は佐渡で、海府村に傳へられて居る事である。此の村に、今も猶、賽の川原と云ふ所が遺つて居る。この賽の川原には、隨分と多くの岩石が散在して居つて、奇妙な景色を作つて居るので、此の地に遊んだ者は大底は見物する。

殊更に造つたと思はれる廣い平な岩々の割れ目の間に、所々貝殼を積だり、また、其の上へ綺麗な石を五重六重に積み重ねたりして此處彼處に出來て居る。一寸見ると、此處へ遊びに來る近在の子供の惡戯かと疑はれる。

けれ共、村の人に聞いて見ると、全く然うでないとのこと。實の所此の石は、十歳に足らぬ子供が、死ねば、その靈がこの川原へ遊びに來て、『石の役』を濟ま

さうとて、苦心をして積み重ねるのである。若し、村の子供等が此處へ遊びに來て、突き崩さうものなら、何處からとはなく悲しい響きがする相な。

それはまだしもであるが、其の積み重ねた小石を、木片などで、つき落して置いて、翌日、見に見くと、不思議にも、原の通りにちやんと積み重ねてあると云ふ。然し、海府村では、別に不思議とも思つてゐない。

養の川原の石地藏は、見ないが、何處からお出ましかしらん。

犬神

（上）

伊豫の國、久米の里を離れた時には、もう夕陽が山の端に入りかけてゐた。

晩秋の野は、酷く寂びて梢に風が鳴る。一人の旅僧が淋しく野道を辿つて行く。

軈て、一軒の離れ家へ來た。その入口に立つて、澁い聲ではあるが、何となう底力の入つた聲で經を讀み出した。

其のうちに、此の家の主人らしい男が、のこ〳〵と出て來た。

『これは、御出家でございますか。御報謝は、内らで致したうございますが、それ共、他々へ、是非御立ち寄りの御約束でも御座いますか。』

餘り叮嚀で、また、如何にも親切氣な男の言葉に、彼の旅僧も、心地よげに口を動かした。

『御親切の程、誠に有難うございます。別に、之れと決めて置いた家も御座いませぬ。野に寢たり、山に寢たり、又、志のある方の宿を借りたりして居ります。』

『それは〳〵、御難澁の事でございませう。では、誠に汚苦しうございますが、せめても、一晩だけなと、御辛抱して、何卒か、御宿りのほどを願ひます。』

『御言葉に甘へて、御厄介に預りませう。』

男は、いとも、親切に、足洗水など持ち來て、取り分け叮嚀に優待した。

此の家には、今一人老婆が居る切りで、別に他に人氣も無さ相である。

旅僧は、足を洗つて、連雀の小包を肩から解いて、傍の置き臺の上へ乘せた、そして設けられた座に着いた。

家の内は、別に廣いと云ふでも無いが、六疊が二間と四疊半が一間で、その割りに庭は、特別廣かつた。老婆も出て來て、旅僧の前へ跪く。

『御出家樣には、よう御出で下さいました。何分、勘樣な、汚い所で、恐れ多い事でございますが、惡しからずに、御ゆるりと御憩み下さいませ。』

『御老婆には、痛み入つた御挨拶、何うして〳〵託鉢雲水の身としては、人家の内に居座する事は、榮譽過ぎます。然し、貴女は、此男の御母堂で御座るか。』

『ハイ〳〵、樣で御座います。御見掛け通り親一人子一人の間で、暮しては居りますが、これが、色々氣を付けて呉れますので、貧しい乍らも、溫かう過ごさして頂きます。』

『いや、それは、誠に結構な御身柄、親子の情は、然う無くてはなりませぬ。拙僧も、永い間、斯うして、行脚をして居りますで、色々な國へ參りますが、親子の間の睦じい人々と云ふものは、數へる程で、誠に〳〵慨しい事でございます。何うも、世の中は色々でございますわい。』

兎角する中、先きの男が、夕餉を出した。旅僧も、遠慮なく、喜んで食べた。

四圍が淡暗くなつて來たので、古びた行燈に燈を入れた。旅僧は、六ケ敷い經

文を出して、默讀してゐる。男は、旅僧に、一寸會釋して、庭の隅へ行つた。それは、草鞋を編む爲めであつた。

暫くするうちに、門口から二人の百姓が這入つて來た。

『小源太さんは、毎日々々、精が出るで、感心だ。然し、今晩來たのは、外ぢやないがね……』

何だか、話でも有りそうなので、草鞋の手を一寸休めて、笑ひ顔を揭げた。

『いや、これはお二人さん、お揃ひで、又、變つた事でも御有りかえ。』

『別に變つたと云ふ程の事でも無いのだが、それ、お前さんも知つての、あの猪、奴が出くさつて、田畑を荒し出したのよ。それで、一つ、去年の如うに、村全體の男衆が、交代に夜番を爲うと思つて、私等二人が當番で、一軒々々相談に廻つてゐる所、もうこれで村は、廻り切つたのだ。まあ、最後に、此方さん所で、面白く笑つて歸らうと邪魔しに來たのでサア』

『それは、御苦勞のこと、毎年あゝ荒らされては、何うも困つたものだ。今、圍爐に柴を入れるから、芋なと燒いて、話さうぢやないか。』

『御馳走々々、さあ、作どんも馳走にならうぜ。』

『有難い。それぢや遠慮なく』

素朴な田舍の男達の心は、飾りつ氣が無うて面白い。

(下)

曉を告ぐる雞の音が、未だ絶えやらぬ間に、昨夜の旅僧は、裝束を整へて庭に降りた。

『小源太さんとやら、此度は色々御世話に成りました。此のまゝ別れるも本意ない。何事でも良いから、遠慮なく云はつしやい。私が、良い樣にして上げやう。』

小源太も、籔から棒の旅僧の言葉に、訝しく思つて、返辭に躊躇つて居た。

『何の遠慮もいらぬこと。拙僧はこれから別れねばならぬこと故』

『では、御遠慮も無く御願ひ致します。と申しますのは、昨晩も、村の若衆が參つて話して歸つた如く、山に近い村のことゝて、夜になると始終野猪が出て、畑の芋を掘つて仕方がございません。出來ます事なら、何うか野猪の出ぬやうに呪禁つて頂きたいものです。村一統の喜び、此の上ございませぬ。』

『成程、それはお困りな事であらう。それしきの事は易い事』

斯く云ひながら、料紙を取寄せ、何か書いて、堅く封じて、小源太に渡した。

『此れを畑に立てゝ置けば、今夜から、野猪は出ない。然し、忘れても、此の封じ目を切つて中を改めては成らぬ。よいかな。』

と、堅く云つて、此の村を立ち去つた。

小源太は、母と共に話して、教はつた通り、其のまゝ、竹の先を割つて畑に立てた。所が、不思議にも、其晩から野猪が出ない。

『阿母、何うも、奇妙ぢやないか。』

『ほんに不思議な事もある。』

それから、三日經つても十日過ぎても、果ては、一月半年と過ぎても、野猪の子一匹も出ない。

餘り不思議なので、村の人々は云ふまでも無く小源太も堪らないので、或日、そつと紙の封を切つて見ると、これは、又、妙、唯、犬が一匹描いてあるきりで其外に何にも無かつた。

すると、見る〳〵うちに、その犬が忽ち紙を拔け出して一つの幻になつて消えた。

封を切つた小源太の驚きは元より、並居る村の人々の驚きは大したものであつた。聽て、若者の一人が口を開いた。

『小源太さん始め皆樣、何と不思議ぢや御座いませんか。小源太さんの話では、

此の封じ紙は一人の旅僧が作へて歸つたとの事、あれは、普通の旅僧では御座いません。屹度です。皆さんは何う御思ひか』

『生佛様が此の村へ御廻りになつたのだ』

評判種々であつた。

それから、この土地では、これを犬神と云ひ傳へる樣になつた。そして、あの旅僧を、弘法大師だと云つて居る。

法恩寺

（一）

太田持資入道道灌は、上杉定正の老臣であつた。關東附近の備へに、武藏野の中に一城廓を築くに當り、重だつたる臣下を初めとして、町人百姓に至るまで、これに馳驅させた。築城は彼が天才である。

道灌が、此の江戸城を築くに就て、長祿元年四月八日一寺院を建設した。それが即ち後の法恩寺である。彼が心では、寺院建設を以て亡き父、資清入道道眞の菩提を弔ひ、また、築城鬼門の鎭めにと思つてのことであつたのだ。

然るに、京都の本住院の住職、日住上人は、其の叔父に當り、且つは、上人の開山である故、平河山本住院と云つた。其の後、永正二年の頃、道灌の孫、資高と云ふ者、その亡父の法恩齋資康の冥福を禱る爲めとて、己が鄕地の武藏三田を

寄附した。この時、前の院號を改へて、法恩寺と稱へた。

本所太平町に在るのが、その後身で、江戸城の近く平河口より、神田の柳原柳原より谷中の清水と轉々して遂に今の地に移つたのである。

平河口即ち今の大手町には、淋しくその趾を遺して、昔の俤は見られない。星移り霜變つて茲に幾年、若し道灌再び生れ來て、その趾を見ることが出來れば實に、今昔の感に堪えぬ事であらうと思ふ。

で、これから、法恩寺の昔を書いて見やう。

(二)

道灌が亡き後は、關東に及の音を聞かない。上杉朝興が江戸城に采配を振つても、道灌の子孫には彼れの冥福に力を注ぐ者が無い。

然し、關東は平和ではなかつた。大永四年正月俄かに雲が動いた。そは、北條氏綱が、數多の軍兵を驅つて、江戸城を攻めたのである。朝興はその猛勢に一時は驚いたが、然しながら、城は堅い。鐵壁である。

けれ共、吾れ等が祖父道灌が築いたこの江戸城を朝興の爲めに乘取られ、その下に動くは、心もとないことであると、折齒、その日の來るを待つて居る者がある。云ふまでも無く、道灌の孫資高であつた。

彼れは、氏綱が攻め來ると直ちに、兵を案内して、城中に導いた。

やがて城内から狼烟が上つた。すると、俄然、城の大手小手に軍兵共の鬨の聲が鳴つて來る。それが、城内へ這入つた軍兵共に相呼應して勇しい。

江戸城は、斯くして、氏綱の有となつた。戰ひ終へて資高を招き、彼が城中へ誘ひくれしを謝し、其の德を稱へむ爲、己が娘を之に嫁して、外戚とした。

氏綱、江戸城を得て、得意滿面に表れ、年の始めの壽を取り分け賑はしく祝つた。

戰國の城内の祝宴は、黄金の光りで眩ばしい。

(三)

此度びの戰ひに、目出度くも、江戸城を得たので、恩功行賞の後ち、各將士の持場、役割りに忙しい。再擧を圖る殘黨の爲めと、駿遠三に風雲ありと知つたからでもある。

乃で、富永三郎左衛門を本丸に置き、遠山直景を二の丸に置き、大和守資高を三の丸に置いた。即ち、この三の丸こそ、道灌が梅林を植えた所で、香月亭が淋しく見える。白梅紅梅入り亂れて、今朝の雪をも耐えて開く樣は、この資高に何を教訓てか、心ありげに笑つて居る。

そのうち、月過ぎ、年經て、天文十六年に至り、資高は、遂に此世を逝つた。それ故、其の子の康資が繼いで、父の後を守る。

康資の血は熱かつた。常々、父より聞かされる、曾祖父道灌遺業の地は茲、その築いたるは、此の城、然も、あの梅は、又來る春に紅白咲き亂るゝ事もあるにこの康資はこのまゝで、他人の城に居る心持ちとは口惜しや。如何にもして、戰國武士の意氣が見せたい。

噫、彼は誠に道灌の曾孫である。彼の熱い血には道灌の血も流れてゐた。

折から十六夜の月は、武藏の端から悠々と上つた。濠の漣を銀波に變へて美しい。彼が、胸に問ひ、胸に答へて相談相手を、直覺したのは、弟、甥の兩人であつた。

(四)

爾來、康資館に在つて鬱々として氣が揚らない。或日、弟源四郎、甥源七郎等康資の樣子を見て、靜かに尋ねた。

『兄上様には、近頃、何事かに御配慮の如う覺えられ、我れ等兩人の者、心地良からず、何卒して、御胸の裏明かし給へ、又、文珠菩薩の助けも哉。』

『噫、よく聞いて呉れた。實は兩人の者……』

と云ひ差して立ち、四圍に氣を附け、容子を伺ひ、又、元の座に直り、威儀を正して、口を開く。

『と云ふのは、外でもない。汝等も知る通り、この江戸城は、曾祖父の築き給ひしもの、又、この亂世に於て、これと云ふ賞翫に與らず、このまゝなれば、一城の主となるは、到底覺束なき事と思ふ。實に、此の好機に生れたる者として男子の恥辱である。我等三人力を合はせば、如何なる惡魔も、平伏さすに難くなし、兎つ追ひつ考へ居たりし所』

『御兄上の御配慮、誠に御道理と思はる。然りながら、先づ第一に如何なる方法にて、御決行遊ばすことや念の爲、御聞かせ下され。』

『尙、太田資正とも深く謀り、また房州の里見義弘とも相談致し、此の城を手に入れ、曾祖父の後を繼がうと存ずるが、何と思ふぞ。』

『我等も常に思ふ所、寸時も早く思し立たれよ。』

（五）

茲に三人心を堅め、愈々康資は、使者を以て、岩槻城に在る再從兄資正入道三樂齋に知らし、且つ、意見を聞く。當時は、關八州を初め、周圍皆北條氏に從つて居たのである。然し資正獨り、上杉氏を思つて何日かは、曾稽の耻を雪いで呉れやうと思つて居た矢先きへ、康資からの報知を得て、一も二も無く心よげに承諾した。

義弘の喜びも變りはなかつた。

斯うして、永祿五年の末となつた。各館内では、密々戰鬪準備に怠りが無い。

この時に康資は、亡き弟資行の七々日の法會なりと云ひ振らして、萬一に處せんが爲に常着の下へ略軍裝をして、源四郎、源七郎等を初めとしてその他、普代の郎黨共、合はして、凡そ、二十一人を伴れて平河口の菩提所は、彼の法恩寺に詣でたのであつた。

甍は聳えて、青く、庭の敷石、滑々として、鏡の如く本堂より紫の烟流れ來て周圍を燻らし、鉦の響き、木の音遠くに近くに響き渡つて、法華宗を力強める。軈て、經讀む聲が、陰に籠つて抑揚が悠々として來た。暫くして、嚴かな亡弟の法會も終へた。一同は、そのまゝ歸館せず、他室に控へ、先づ、三人のみは番神堂の内に入り頭を集めて、切りと謀り事を廻らすのであつた。その密議が終ればやがて、二十一人の郎黨共を招き入れる。

抑も、知らぬ寺院の僧には何と取る。

（六）

七々日の法會は法會だつたが、物々しい豪の者共が殘つて一室に入り、餘念なくも、密々話し、住僧の訝るのも道理、抜き足、差し足で、障子の近くまで來り、そつと耳を立てる。

住僧が、變だと思つて立聞きすれば、意外！思ひ掛け無くも、この怖ろしき陰謀、逸早く注進せねば當山が危い。隱し立ては到底覺束無いこと、是が非でもと住僧獨り心で決めて、江戸城は、二の丸指して宙を飛んだ。

住僧の注進の樣子を詳さに聞いた、遠山直景、その突然の出來事に、驚き、數多の軍兵を隨へて、法恩寺へ駈け付く。

一方、法恩寺の者、神ならぬ身の、こゝの住僧が注進せしとは少しも知らず。熱心に語り談り合ふてゐた。

住僧の注進を聞いて、また、驚いたのは、この法恩寺の同宿本行坊であつた一統の者が不憫と察し、江戸城から來ない迄に、逃がしてやらうと、事の由を静かに告げた。康資等、本行坊の厚切を謝し、空を白眼んで歎息した。今迄の厚き恩も忘れ、檀家の好誼も知らずして注進したものと決定つた。止むない事であるが、今は、落ち付き居る場合では無い。と心を決し、先に妻子を移して置いた本郷に馳せ歸り再び伴うて、心ならずも、そのまゝ、岩槻の城へ逃る。直景が來た時には、人影すら見えなかつた。

（七）

折角の謀事も、今は露はれ、無念の齒嚙みをするのみであつた。そして江戸城の方角を眺め付ける。

斯うなれば、男らしく、北條氏を相手にして、刀折れるまで戰ひ、矢盡きる迄爭つて見やうと堅く決心した。そして、里見と一手になり、愈々、堂々の陣を張つた。

資正、康資各々兵を率れて下總に進む。義弘の方では、亦た、安房、上總の兵六千餘を從へて、國府臺に出陣する。

此の事を直景から聞いた小田原の氏康、其の子氏政と合して、伊豆、相模、武藏の兵、凡そ二萬餘騎を率ひて、義弘の陣取る國府臺に向つた。この時は、遠山直景、富永三郎左衛門等は先鋒である。月は正月、日は六日、敵味方、木の瀨の水を挾んで對陣した。寒い夜は明けて、北風身を刺す。朝を待つて、直景に三郎左衛門の二名、ザンブと水に入り流れを亂して、敵陣に進む。これに續いて氏政の軍三々五々水に入る。

この時、臺上の義弘、迎も相對の戰ひ覺束なし、敵を引き入れて、挾み討つが良分別と、獨り合點して、前方の軍兵に令して、皆々臺上に呼び返す。直景、三

郎左衛門の二人、敵逃ぐると見て、益々追撃するのであつた。

義弘の將、正木時綱は、既に伏せある臺側の兵に命令一喝！

『討つは今ぞ！』

（八）

不意の伏勢に、多勢の敵兵も一時は膽を拔かれたが、大將の叱呼に追はれ、また盛り返す。

然し、軍兵を勵まして、驀ぐらに進み來る康資、源四郎、源七郎の絶倫の勇には對る敵とては一人も無い。康資が狂ひ來る直景、三郎左衛門の二人を切つて捨てたのはこの時であつた。

突然、氏政の軍中より一騎躍り出た。それは、當時名代の豪傑、清水太郎左衛門であつた。太郎左衛門は、手に餘る長き棍棒を持ちヒウ〳〵風を唸らして來る康資も去る者、太刀振り覆り、風車の如き棍棒と渡り合ふこと數十合、一上一下飛鳥の早業、その樣龍虎の爭と疑はれた。敵も味方も、手に汗握つて、堅唾を呑む。

太郎左衛門が大上段から振り下ろした棍棒の勢ひに、康資の大刀は、中段より折れて宙に飛ぶ。康資、隙さず、八尺の鐵棒を提げて元に歸つて見たが、肝心の太郎左衛門は居ない。

仕方が無いので、鐵棒振り廻し振り廻し、敵の軍勢へ亂れ狂ふので、近寄る者は一人も無かつた。この時氏政の將、太田下野、康資の振舞を打ち眺め、大音聲

『我が婿なるか、如何に新六、何故道なき謀反を起したるか、先非を悔みて、早々、降參致せ。然なくば、汝の命、我れが打ち取らん』

（九）

康資、之れを聞いて、莞爾と笑ひ、

『此處は戰場、今は敵なり、何の悔やあらん』

云ふが否や、側近く進み、鐵棒押取り、ハッシト擊つた。下野、太刀を翳してカチリと受けた。受けたはづみに、刀身折れて段々と飛ぶ、鐵棒、下野の頭蓋を碎いて、無慘に斃れた。

『今は何者をか怖れん』

と勇氣彌增し、當るを幸、薙ぎ倒し薙ぎ倒し、野草の中を進み行くより容易であつた。此の猛威を見て康資の軍兵勇みに勇み立ち、我れ先きにと打つて入る。

一方では、正木時綱、心中大に勇み、尙も、士卒を勵まして、遮二無二斬つて〳〵斬つて入る。此の時、敵の勇將、山角四郎左衛門、中條出羽、河村修理亮その外百四十餘騎を斬り落した。

此の勇に、今は、勇氣百倍して、源四郎源七郎も進みに進み、人を斬ること數ふるに遑が無い。

今は、小田原勢、迚も叶はず、心怯むと共に俄にドッと崩れ出した。時綱は、勢に乘じて、敵陣に突いて迫る。敵の何人も、此の奮進には對る者が無かつた。

何處より來たか、何時の間に現れたか。黃八幡の旗、北風に飜つて、堂々と進み來るを見た。それが、ふと隱れて、また、現れる。神出鬼沒の中に、忽然と、眞近に現れて、横樣に時綱の陣を突いた。

（十）

黃八幡の旗とは、小田原方での曉將、人も知る北條綱成とは判まれた。此所を先途と闘ふ北條勢、消えやうとする勢も再び返つて、獅々奮迅の大活動となつた綱成は、猶も、軍兵を勵まして、縱横に斬り込る。この勢に時綱の軍勢、玆に傷つき、彼處に斃して、見る〳〵中に、死屍累々、血は流れて川を作る。

北風は寒さを忘れて、入り亂れる大軍勢の呼吸に暖められ、醒い人氣を南へ散らし西へ運ぶ。

劍檄相摩して、火花を飛ばして物凄い。

斯くして、時綱の兵、敗れて退き出した。義弘、暴氣となりその二陣を進めて綱成の軍に當る。氏政も今は、默り兼ね、

『此の時なるぞ、綱成方へ加はり、進めよ、突けよ。』

斯く云ひ終るや、一鞭あて、馬を走らす。士卒も、氏政に後れじと、懸命になつて之に續く。砂は飛んで煙の如う。上總介綱成、尙々勇みに勇み、狂ひに狂ひ夢我夢中に突いて入る。

劍の響きは、竹を割る如う、鎧の音は、夕立の聲の如う、ヤッ、オッ、ワアの聲々此所彼所に鼓膜を破つて、錯綜、混沌轟き渡る。阿修羅王の狂へる樣は、迚も、人界の動きとは思へなかつた。

黑白定まらないうちに、黃昏れた。軈て、兵を收む。

（十一）

國府臺の義弘の本營では、その夜、數多の首を實檢した。取り分け、敵將遠山直景、富永三郎左衛門等の首級を見た義弘の喜びは大したものであつた。

今日一日の戰ひで、敵の傷手は甚だしい。殊に、小田原勢の侍大將等は多く討たれた故、必ず此の地を引いて退くことである。明日は此方より川を越して合戰に出やう。今宵は、凱旋の祝盃を揚げて、心を靜め、英氣を休めやうとて、資正、康資等を集めて、心地よげにその夜は歌ふのであつた。

然し、小田原勢では、無念骨隨に徹して、軍を揚げたものゝ、何うしても明日の戰ひまで、今宵は、まんじりともしない。將師の策を立てゝ、斥候隊長由井源三の部下横江忠兵衛、大橋山城と云ふ二人の武士を房州勢に紛れさして、その夜

の有様を探らした。二人は、早くも房州勢の情況を見届けて、小田原勢の本陣に歸つて、氏政に注進した。

時好しと覺つた氏政、其の夜、再び兵を集めて、武具を整へ夜襲に出た。

氏康も之を聞いて、氏政の軍略に讃し、又、兵を合はして、北風を切り、闇を縫うて進んだ。

氏政、氏康等、川より二軍に分れて、敵の陣地の南北に進み、之を圍んで息を殺す。

一陣の北風、ヒウと唸りを生じて、伏勢の上を走つた。兩軍が先陣の最近に來た時、轟きの聲を上げて突入した。

（十二）

不意の夜襲に遇つた房州勢、愕き狼狽、四方に散亂して防禦に力む。

武具を把るにも暇無く、甲は丙のを、丁は乙のを取り、亂れに亂れて、其儘本陣を東より潰えて見苦しい。

この時、氏康、眞先きに走つて、自ら白柄の長刀を右に振り、左に廻し、ヒウ〳〵と風を切つて雉ぎ斃す。その數凡三十餘騎と註せられた。

房州勢では、義弘の弟の忠弘、正木時忠、菅野清成、武田信榮等怒り狂つて、猛虎の如く防ぎに防ぐ。

今迄靜かな地上も、此の霹靂に、森羅萬象を眼醒めさして、再び修羅場となる。

氏政、氏康等、各々奮戰力爭して、忠弘以下十八將の首級を上げて、勝鬨の聲天地に響いて勇しい。

房州勢の將に正木彈正左衛門と名乘つて、八大龍王の荒れたかの如き、大勇を小田原勢に示す者があつた。その害に合ふ者幾百十人と云はれた。氏康の將、山田伊豫、進んで之に當らうとし、遂に、正木と戰つてその首級を揚げた。正木彈

正左衛門とは、正木時綱の通稱であつて、義弘の勇將であつた。

此の戰ひに、房州勢四方に潰え、八方に亂れ遂に敗北の慘目さを味ふに至つた。

勝ちて甲冑の緒を締めなかつた、諸將を惜む。

（十三）

義弘の無念さは如何であつたらう。逃ぐる味方の奴原を血眼でにらみ、奥齒を嚙んで涙を呑んだ。孤軍踏み止まつて、力の有らん限り刀の折れる限り戰つた。

その時何處からと無く、唸りを生じて飛んで來た箭が馬の股を貫いた。馬は痛手に倒れる。

義弘、愈々死を決して、狂ひ戰つた。この時、義弘の從士安西伊豫、側近く飛び來り、息も切れ〴〵聲を上ぐ。

『御大將の討死し給ふ所にてはあらず、伊豫御道筋を開き申すべし、早々、この馬に乘らるべし。』

叫びながら、馬よりドッと降り、義弘を之に乘せて、上總の方を指して逃れ走る。

然るに、またの從士秋山將監、加藤左馬之亮、勝山豐前、長南七郎、佐賀伊賀鳥居信濃、多賀越後等、義弘の姿を失ひ、諸所を探ね廻つた。遂に主を得ず、斃れた馬を見て、涙を流した。

彼等は、專心、主を討たれたものと思ひ、生き長らう要なしと覺悟して、縱横に斬りまくり〴〵、遂に、敵刄に斃れた。

資正、康資等もこの亂れた中に暫時奮鬪したが、今は詮ないと覺つてか、遂に血路を開いて一方に退く。

氏康の勢ひ八方に響き渡り、安房、上總の地を督して凱歌を唱へた。

（十四）

斯くして、房州勢は敗れた。そして、三鱗の定紋、春風に燦然として、房總の諸士皆之れに從ふに至つた。

哀れ、康資、若槻の城に歸り、無念の月日を送るのであつた。戰場で妻の父を討つた事を話して千秋の悲劇を作つた。

夫の話に、心を痛め今は詮方なく〳〵下僕に命じて、父の樣子を戰場に見に行つた。一刻千秋の思ひで待つた妻は、下僕の歸りに、如何にお座せしかと返事を聞かうとすれば、下僕語らず、唯、泥に塗みれた父の遺骸を見せるばかり。妻の悲しみは、譬ふるに物がなかつた。

× × × × × × × × × ×

煤ぶつた黑い彌陀佛の前に、優しい僧侶が切りに珠數を繰つて居る。香の烟りは、白い筋を靜かに立てゝ堂内の氣を沈める。散り行く春の殘りを手向けの花に現はして暗い。

西日は伽藍の樋に映えて重い光りを投げる。例の僧侶はやがて立つて其の廊下を歩む。瞬きの黑い眼には露があつた。衣の袖でソツト拭いて首垂れて行く。

それは、夫の罪を父に詫ぶる康資の妻であつた。

即ち、神田の淨心寺は、その頃、康資の妻が尼となつて、父の墓前に香を捧げ、花を供へて淋しい世を送つた所である。

噫法恩寺に、一世恢復の謀を談じ、曾祖父を憶ひ、父を思ひ、絶倫の勇を奮つて遇々思ひを通したも、遂に一夜の油斷に花咲く春を失つた。

法恩寺の悔、決して悔では無く、一世を思ふ爲めの永刼、美しい心事の趾である。

爲して成らないは、男子の斷ずべき所、爲して成らないは、天である、命である。

道灌、道灌を思ふ子孫を持つ。道灌亦冥して可。

玉垣の石の數

『オイ、八兵衛や、今日は、上の太子様の御縁日だで、お詣り爲やうぢやないか。』

『そう〳〵、今日だてなあ、詣かう。俺、お花を伴れて詣くだから、汝も、吉を伴れて詣かんか。』

斯うした仲の良い、老爺が、その日の田仕事の歸路さ親しげに話してゐた。二人は、各々、孫の吉藏とお花とを同伴て、村離れの太子様へ詣つた。

太子様とは、聖德太子の事である。今、兩人が、その墓の玉垣に立つて、切りに手を合はして拜んでゐる。軈て、八兵衛が、

『何故、この玉垣の石は、數へ切れないだかなあ。』

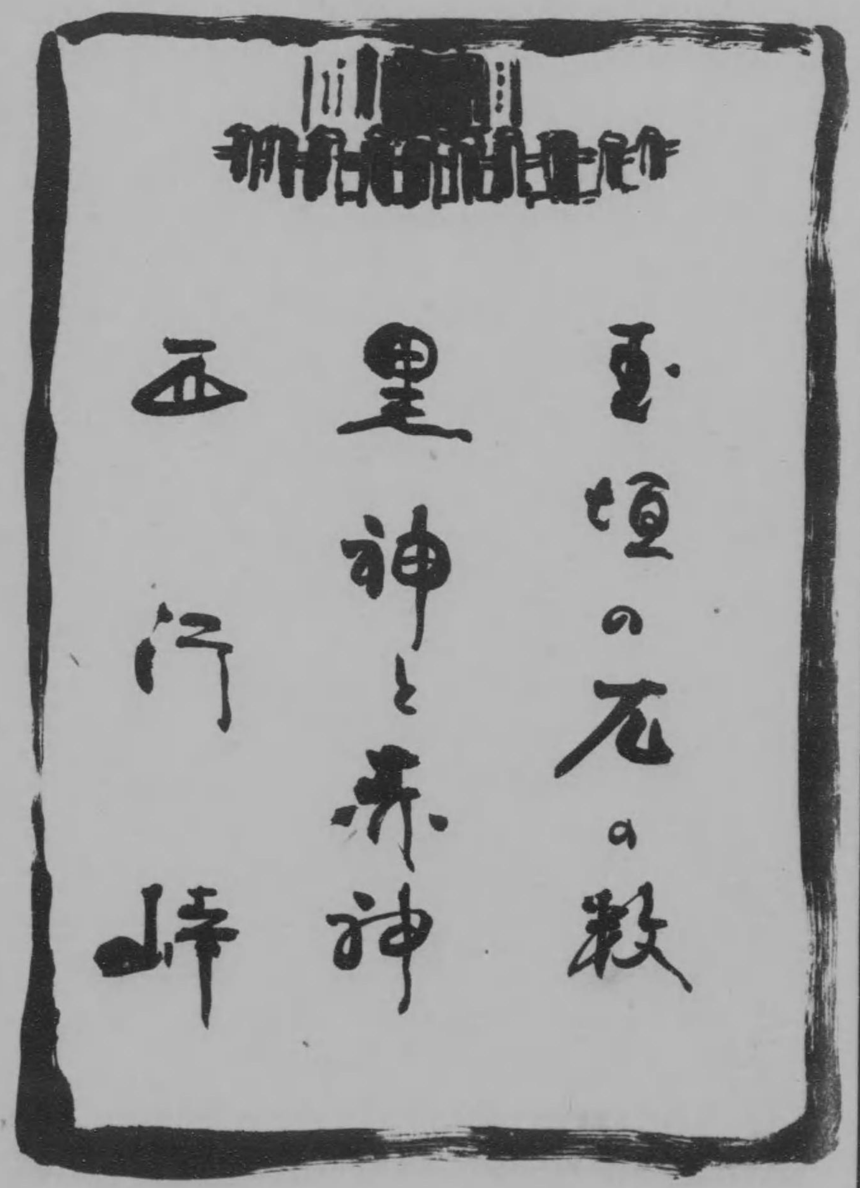
『汝は、未だ知つてねえか之は、地下の者で知んねえ者は、少いだ。何でも、太子様が、御存命中御自分で、墓を築く御心で、近くの二子山から、石を運ばれ

た。所が、その石の數と云ふのが、五百でさあ。一晩の中に運び切る筈で、おありだ所、悲しいこと、四百九十九運んだ時、鷄が鳴いて、夜が明けたと思へ、太子様では、何うしても、五百を夜の明けない中に運ぶとの祈願だもんで、殘念ながら、もう一つが出來ない爲、仕方がねえで、到頭、そのまゝに成つたんよ。そこで、其の數を人に知られるが、嫌なので、今に、其の數が判然しないや。それから、此の地下ぢや、雞を飼はないだ。それは、汝も知つてるべえ。また、この附近の樹には、鳥が止らないし、上をさへ、飛ばぬだ。』

『汝は、滅相、詳しいな。吉に、お花、一つ數へて見べえ。』

その墓は、河内の國、南河内、磯長村と云ふ所の叡福寺内に在つて、土地では唯、上の太子として、知られてゐる。この墓の石の玉垣の數は、誰が幾度數へて見ても、數が合はない。

で、今も、確な數を知つてゐる者が無い。



黒神と赤神

陸奥の國と陸中の國との境に潭々たる十和田の湖がある。其處には其の昔、寶に美しい女神が住んでゐた。女神の容姿は寶玉の光りを放ち黄金を展べた如うでその裳裾からは燦たる白銀の輝きが出て、百里四方にも及んだと云ふ。

その當時、陸奥の國の龍飛崎に、黒神と云ふ神が住み、羽後の國の男鹿半島に赤神と云ふ神が住んで居た。十和田湖の美しい女神の光輝を浴びた黒神は龍に乘つて飛んだ。龍飛崎とはそれからだと傳へられてゐる。所が一方、赤神は鹿を走らして女神を得んと談合に掛つた。男鹿の名もこれから出たと云はれてゐる。

如何な美しい女神も、是には、何うして良いか判然ない。途方に暮れて深い思案に耽けた。一時は優しい赤神の方へと心が傾いたけれども、雄々しい黒神の威勢を想つてはまたも、迷つてならなかつた。で、女神の方では、困り果てゝ、

兎角の返事を一日延ばし二日延ばしゝて漸く二十日許り延ばして來た。

所が黒神では、女神の返事が煮え切らないので、確かな返事を聞かうと最後の手段を取り、渦卷く黒雲を起こして、怖ろしい龍に股がり、一瀉千里の勢ひで黒鐵の如うな顏に强い決心の色を現はして行つて來た。

十和田湖の邊で龍から降りた黒神は、遠慮會釋もなく女神の御殿へ這入る。女神の臣家共は、何でも得云はずに默つて通した。それは、殆んど毎日の如うに來る黒神の事でもあるし、また、その威勢に、怯氣て居たからでもあるのだ。慣れた宮殿を奥へ通つて女神に會つた。女神は今更の如うに何うして返事したものであらうかと始終伏し目勝であつた。黒神は鐵板を敲く如うな聲を出して女神に詰つた。

『今日は何うしても返事を聞かねば歸らぬ。是も私一人の話なら斯んなにまで早急ないのであるがこちらへは、赤神の方から、始終、使が立つと聞いたからには、お前樣が私の云ふ事を聞かないとなると、この黒神の意地が立たぬ。日本八百萬の神達に顏が出せぬ。假令、赤神が何んな事を云はう共、こればかりは、默つては居られぬ。赤神と一戰爭してでもお前樣を靡かす。えゝ必ずの事、さあ、女神の最後の返事が聞きたい。』

美しい女神の兩眼には、玉の露が輝いた。そして如何に返事してよいかゞ、突然の場合だから出ぬ。黒神の云ふ事を聞けば、赤神に申し譯けは無し、と云つて赤神に從へば黒神が何んなに荒れるやも知れず、身一つの此の體、今は詮術も無く、つく〳〵自分の不運を嘆いて、やがては、耐え兼ねたか、よゝと泣き伏した女神としては、今は泣くより外は無かつたのである。此の時、女神の泣き聲に伴れて山の鳥が一度に泣いた。それが傳つて、今も、十和田湖に棲む南鷄鳥といふ黒神は、氣の毒と思つたのか、少しく言葉を軟げて、

『そりや、考へて見るとお前様としては、板鋏みの場合であるから、辛苦ことであらう。私等許りの事を考へても、お前様が立つまい。若し赤神の方から使者が來たら、黒神が斯う云つて居たと事託て下され。それは、「何日迄もお互に斯んな事を云ひ合つて居ては、唯、徒らに日を費すばかりであるから、女神の夫になるだけの力があるか、何うかを競べて見やうぢやないか。今の塲合お互の意地を通すには、是が上策であると思ふ。それで、明日、早朝出軍の用意をして置くやうに。」と云ふ事である。必ず赤神に云つて下され。では、これで一先づ引返さう。』

斯う云つて黒神は、泣き入る女神の肩を撫せて、再び龍に乘つて黒雲に隱れた黒神の姿が消えた頃、それと入れ代つて、赤神からの鹿の使ひが、宮殿を訪れた。禮儀正しく、案内に伴れられて、女神の前に跪づく。女神は、今は居耐らず、泣き悲しむばかりである。使者も氣の毒に思ひ、使ひの言葉も得出さずに共に泣いた。女神は意を決して、先き黒神が來たこと、赤神への云ひ遣したこと等、初れ〴〵に悲しく述べた。すると使者は、女神に何事か耳元で囁いた。女神はそれを聞いて一時は喜んでも見たが、また、深い考へに沈むのであつた。使者は、その取るべき手段のこれより外はない事を諄々と語るので、女神は遂に首肯いた。

軈て、其の日も暮れて翌くる朝となつた。紫の雲が東に靉靆く。日の光りが淡靄を通して十和田の湖に七色を投げる。四方の山々は緑の姿を燻らす。

そのうちに、陸奥の國空から、轟々と音がし出した。麗しい朝空も破れて黒雲が飛ぶ。風が鳴る。すると羽後の國空から眞紅の光輝が、陸奥の國空に向つて射出する。黒神と赤神との間に、到頭戰爭が始まつたのだ。玉の劍は光り、石の矢は音を立て、岩の楯が動く、彌々雲飛び風荒れ波逆卷く大激戰となつた。黒神軍が寄せば、赤神軍が返す。赤神軍が寄せば黒神軍が返す。寄せつ返しつ、揉みに揉んだが、決戰何れともつかぬ。

此の戰ひが、それからそれへと傳へられたので、各使者共が早速く神々に告げた。全國の八百萬の神達、遲れはせじと玆に走せ集り、岩木山に陣取つて、黒神赤神兩軍の働き振りを觀戰するのであつた。それも、黒神に贔負の神は右の方、赤神に贔負の神は左の方と其れ等の神々でさへ左右に分れて固唾を呑んで居た。

所が、各贔負の神々が、餘り多勢、岩木山に集つたので、山の兩肩が、蹈み崩された。黒神贔負の方は六七分で、赤神贔負の方は三四分しか無かつたので、岩木山の右の肩は左の肩よりか低く、左の肩の低さもその割合に落ちたのである。それは、今も、そのまゝ、山姿ゆるやかに跡を遺して居るのは不思議だ。

話は變るが、赤神方の軍師に蒐道と云ふものがあつた。その蒐道が、鷹の巣の森に參謀陣地を構へて、切りに、戰策を廻らしてゐた。一術策を案じて、使者を岩木山麓の指令神に走らせた。で、一先づ、氣を沈めやうとて、根株を枕に、夢路を辿るのであつた。所が、赫々たる日輪が、天空から、眞逆樣に、洋々たる大海に落ちた。ハッと思つて蒐道が夢を破つた。夢が破れると同時にそのまゝ彼は黄泉の國へ旅して仕舞つた。

さて、兩軍の戰ひも、今は酣と云ふとき、黒神軍から赤神軍の中へ黒暗々たる濃雲が雪傾る如うに落ちて來た。それが爲、進むに進まれず、矢を放つにも、劍を撫すにも、思ふに任かせぬ不利な狀態となつた。見物の神々の中でも、赤神贔負の方は、今、黒雲が赤神軍を掩ふたのを見て、心配で耐らず、何うなる事かと氣を揉んでゐる。それに反して、黒神贔負の神達では、得意滿面に表れて、意氣揚々である。

兎角する中、黒神勢は、勢鋭く赤神勢の前面へ、ドッと鬨を作つて突擊した不意を食つた赤神勢俄かに四方に潰えて見る影も無く亂れた。黒神勢は、勇氣百倍して男鹿の城の根元まで迫る。遂に黒神勢の後軍も來り八方を圍んで蟻の這ひ出づる間隙さへ見せず、今は早やこの男鹿の城も累卵の危きに至つた。

その時、突然城上へ赤い光り物がして、その中から赤い大鹿が一つ現れた。そして幾百の小鹿が連つて後ろから續いて來る。軈て、靜かに黒神軍の前へ降りて來て一同跪いた。それは、赤神の軍使で降伏を知らせに來たのであつた。其の條件として赤神は、またと再び神世に出ないで、男鹿の岩屋の中へ隱れて仕舞うから、軍を納めて呉れとの事であつた。黒神も原々赤神が憎くて爲た事ではないのであるから、願ひを聞き、軍使を慰めて音無しく歸してやつた。

黒神は、其のまゝ軍を引き、勇ましく勝鬨を揚げて、悠々と、龍飛崎を指して引き上げた。然し黒神は、その途中、十和田湖の女神を訪づれて、この戰ひの勝敗を知らさうとするのであつた。愈々女神は、我が物なりと得意氣に、宮殿に入らうとした。噫、不思議！　宮殿には女神の姿が見えない。女神は愚か、臣家の者共の影すら認める事が出來ない。血眼になつて諸所隅無く探したが分らない。愈々、欺罔されたと知つて、怒り心頭に發しむら〳〵と黒雲を起し風を唸らした

倉皇、歸途の軍を喚んで、津々浦々に走らして見たが女神の音は聞く事が出來なかつた。

それから暫く經つて、偶然、過日の戰ひを見物した八百萬の或神から、赤神の隱れた岩屋の中に、女神も共に隱れてゐると云ふ事を聞いて、黒神は、百千年の息を一度に吐いて嘆息したのである。

其の吐息の力で、蝦夷が津輕から離れたと云ふ。

然し今は、吐息をして居る場合で無いと覺つたので幾何千の軍勢を集めて、男鹿の岩屋へ押し寄せて、大勢が一同にありつたけの力を出してその岩の扉を動かしに掛つたが金輪際動かばこそ、三日三夜と云ふもの扉を開くに餘念が無かつた。

けれ共、それは無駄であつた。

黒神はその軍勢を引き返して、陸奥の龍飛崎に一世を恨んで山海を動かした。常に怒濤に乘り、黒雲に飛び、怖ろしい龍神となつて天空、海上を狂ひ廻つた。

で、八百萬の神も氣の毒に思つて、色々と神運を說いて慰めた。黒神も漸く靜まつて津輕の海を白眼んで暮らす樣になつた。

今も猶、龍飛崎には、形の奇妙な黒い岩が散在して、海岸には一段と浪が荒い。そして、一方男鹿の岩には概して赤いのが多い。また、大戸瀨、小戸瀨などの西海岸の不思議な景色は、黒神赤神の戰ひの激しかつた名殘りを止めて居るのであるとのこと。

西行峠

過ぐる夏、駿州富士川の上流を寫生爲ようとて、友の村田君と忽然旅行した。その道すがら、西行峠と云ふ峠に掛つた。玆は、甲斐の國南巨摩郡にあつて、駿河路から富士川に沿うて、甲斐へ出る路である。西行峠と云ふのだから何か西行に關係した話でも無からうかと思ひ、麓の茶屋で晝食を濟ましながら老婆に聞いて見た。案の如く有つた。一寸面白かつた故記して見やう。

有名な西行が、歌修行に諸國を廻り、彼處で二日此處で三日と急がぬ長旅に、漸く、東海道を北に逸つて甲斐路に入つた。富士川に沿うて國境に這入つた時には大した險岨でもないが、小さからぬ峠に掛つて居た。西行では、此の時は、まだ甲斐は初めてであるから、歌の名人が居るか居ないか分らなかつた。峠の中腹まで來たとき、一人の山賤に出遇つた。法師は、此の男に尋ねたら、定めし歌

詠む人が判然るであらうと、行き過ぎやうとする山賤を止めて、

『少々お尋ね申す、實は吾れらは、歌の修行者であるが、此の甲斐の國には、歌詠む人があるか。あれば、詳しう敎えて下され。』

山賤は訝し氣に、法師の姿を見入り、暫く足下から頭の先きまで、ぢつと見詰めて動かない。法師も變に思つたのか、又、語を續いで、

『何故、御身は、吾れらを疑はれるか、決して、怪しい者では無い。歌修行者に違いないのである。心配御無用のこと、早々御知らせあれ。』

と、詰つた。二度のたづねに、山賤は、嘲ける樣な、面持ちで、薄く笑ひながら、

『お前樣は、何處の何人か知んねえが、甲斐の國には、歌詠む人許りで、名人とても幾人居るか分んねえ。まあ、國へ行くまでに、私が手初めに、一首詠むべえから、一寸聞いてくんねえ。えゝッと、いきつちな、つぼみし花が、きつちなに、ぶつぴらいたる桶とじの花。てえんで御座る。さわお前樣のを一つ聞くべえか。』

西行法師も、此の歌には困つた。分らないと云ふと、馬鹿にするであらうと思ひ、心ならずも再び、詠み直させて見やうと、

『面白い、濟まぬが、もう一度聞かして下され。』

『外のを詠めと云はつしやるか。』

『いや、お前樣が、今詠んだ歌でよい。』

『また詠めと云はつしやるか、幾度でも詠むべえ。いきつちな、つぼみし花が、きつちなに、ぶつぴらいたる桶とじの花。何うだい、お分りかい。』

『フゝム』

『分ったのかい』

『ウーム』

『分らんのかい』

『ウーム』

山賤は、氣の毒に思つて、後を問はずに、その儘行き過ぎた。法師では、山賤さへ、こんな歌を詠む位だから、甲斐の國内に入れば、何んな目に遇はされるかも知れない。今、少し修行してから、更めて、出懸ける事に爲ようと思つて其處から引返した。これが爲め、此所を指して、後日人々が、西行峠と云ふ如うになつたのだと老婆が物語つて、鼻を啜つた。所が、友の村田が、

『婆さん、ぢや、その山賤が詠んだ歌の意は、一體何と云ふんだらうね。』

『旦那樣方も分りませぬか。』

『分るものか。ねえ、君、君は何う判じる。』

先程から歌の意を考へて居た私は、村田君の不意の言葉に、驚かされて、やをら、口を切つた。

『分らないねえ』

『君もか。ぢや、二人は歌修行の法師だい。アッハ、、、』

『アハ、、』

この笑ひにつれて老婆も笑つた。

『ぢやお話し致しませう。それは、斯うなんで御座います。往く時に、蕾んでゐた花が、歸る時には咲いてゐた。と云ふ事で、桶とじの花と云ふのは、櫻の花の事で御座います。櫻の皮は、曲物をしめるに使ひますから櫻のことを桶とじと云ふので御座います。』

私は、面白い事だと思つて、手帖に控へて歸つた。其の後、また〳〵或友から右によく似た歌を聞かされた。それは、

えきさまに、つぼみし花が、かえりちやまに、

さくもさいたり、わつぱどちの花、

と云ふので、此の歌は、羽前の國、鶴岡邊でよく傳へられて居る相であるが、これに關した深い傳說を聞かないのは殘念である。

音戸の瀬戸

船頭可憐いや音戸の瀬戸で、
一丈五尺の櫓がひわる。

櫓がひわると往き來の船頭が愚痴るほど、瀬戸の潮は矢を射る如く强い。それは、瀬の幅が取り分け狹いからである。故に、船を操つることは容易でない。一丈五尺の櫓がひわる。誠に然りである。

愚痴りながらも、船舶の總てが、この瀬戸を過ぎるのは、如何なる理由であらうか。潮が强く共、櫓がひわる共、舟路が殊更に捷いからである。然も、今も猶萬民その惠みに浴して居るのは誰の爲か。

一體音戸の瀬戸とは、安藝の國、安藝郡、警固屋町と音戸町とを通ずる海峽のことである。清盛がこの安藝守に任ぜられたのは、二十九歳で、從四位の下であ